

滋賀県平和祈念館 第24回企画展示

『写真週報』に見る戦時下の女性 (会期: 令和元年9月29日～12月22日)

滋賀県平和祈念館 第24回企画展示

『写真週報』に見る
戦時下の女性

SHIGA PEACE MUSEUM

戦時中、日本政府は様々なメディアを使って、戦争への機運を高め、国民を戦争へと駆り立てました。政府の方針や発表などを写真やイラストを多用し、分かりやすく国民に伝えた『写真週報』もその一つです。そこには男性の勇ましい兵士の姿だけでなく、労働力不足を補うため勤労動員で働く女子学生や銃後の暮らしを守る妻、戦場で働く従軍看護婦、兵士への慰問活動を行う大日本国防婦人会など、当時の政府が求めた女性像が写し出されています。

今回の企画展示では『写真週報』に描かれた女性像と比較する形で、滋賀県での戦時下の女性の姿をモノ資料と体験談で紹介いたします。

最後にりましたが、今回の企画展示におきましては、県立男女共同参画センターより多大なご協力をいただきましたこと、深くお礼申し上げます。

令和元年(2019年)
9月29日(日) - 12月22日(日) <入館無料>

開館時間 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日 月・火曜日(祝日にあたる場合は開館)
駐車場 約50台(無料)

滋賀県平和祈念館

〒522-4637 滋賀県栗東市平和祈念館 651号棟
TEL 0749-46-0300 FAX 0749-46-0350 E-mail heiba@pref.shiga.lg.jp

チラシ表面

滋賀県平和祈念館 第24回企画展示

『写真週報』に見る戦時下の女性

【学芸員による企画展示説明会】
10月5日(土) 13:30～

【大人のための歴史教室】
第1回 10月12日(土) 13:30～
「はしまりは満州だった」
満州へ送った日本女性の戦時下のくらしや戦争への動員について
第2回 11月9日(土) 13:30～
「わたちのシベリア抑留」
ロシア国立公文書館資料が語る女性のシベリア抑留の事実
生田 美智子 氏(大阪大学名誉教授)

【地域交流室】
「戦時中の体験 触れる 感じる そして考える」
9月4日(水)～12月22日(日)

【映画会】 ※いずれも13:30から
・9月22日(日)「金のビザ」主演/加藤 剛
・10月27日(日)「戦艦の記録 インパール」NHKスペシャル
・11月24日(日)「カメジロー〜沖縄の青春〜」出演/津島山 正徳ほか
・12月22日(日)「ザ・ハント ナチスに狙われた男」出演/トマス・グルスタッドほか

平和祈念館からお願い

■体験談に関して
当館では戦時中、国民を戦争へと駆り立てた『写真週報』を多用し、分かりやすく国民に伝えた『写真週報』もその一つです。そこには男性の勇ましい兵士の姿だけでなく、労働力不足を補うため勤労動員で働く女子学生や銃後の暮らしを守る妻、戦場で働く従軍看護婦、兵士への慰問活動を行う大日本国防婦人会など、当時の政府が求めた女性像が写し出されています。

■資料寄贈に関して
当館では戦時中、国民を戦争へと駆り立てた『写真週報』を多用し、分かりやすく国民に伝えた『写真週報』もその一つです。そこには男性の勇ましい兵士の姿だけでなく、労働力不足を補うため勤労動員で働く女子学生や銃後の暮らしを守る妻、戦場で働く従軍看護婦、兵士への慰問活動を行う大日本国防婦人会など、当時の政府が求めた女性像が写し出されています。

詳しくは「滋賀県平和祈念館」までお問い合わせください
TEL 0749-46-0300 FAX 0749-46-0350
E-mail heiba@pref.shiga.lg.jp

アクセス

滋賀県平和祈念館

チラシ裏面

ごあいさつ

戦争中、日本政府は様々なメディアを使って、戦争への機運を高め、国民を戦争へと駆り立てました。政府の方針や発表などを写真やイラストを多用し、分かりやすく国民に伝えた『写真週報』もその一つです。そこには男性の勇ましい兵士の姿だけでなく、労働力不足を補うため勤労動員で働く女子学生や銃後の暮らしを守る妻、戦場で働く従軍看護婦、兵士への慰問活動を行う大日本国防婦人会など、当時の政府が求めた女性像が写し出されています。

今回の企画展示では『写真週報』に描かれた女性像と比較する形で、滋賀県での戦時下の女性の姿をモノ資料と体験談で紹介いたします。

最後にりましたが、今回の企画展示におきましては、県立男女共同参画センターより多大なご協力をいただきましたこと、深くお礼申し上げます。

令和元年9月29日

滋賀県平和祈念館

プロローグ『写真週報』



『写真週報』は、国家総動員法が公布される直前の昭和13年（1938年）2月16日に、国民の戦争への総動員体制の構築に向けて、写真を多用した紙面で政策をわかりやすく国民に伝えるために、内閣情報部が創刊した政府広報の雑誌です。

写真週報には、大本營が発表した戦争の成果のほか、植民地支配から解放された現地住民が日本に協力する姿、英・米国民の残虐卑劣さやドイツの軍事的な強さなど、政府が国民へ伝えた国際情勢の記事とともに、食糧増産・金属供出への協力や勤労動員、隣組の活動、学徒の志願兵など、国策協力の記事が数多く掲載されました。記事の多くは、政府が国民に求めた「聖戦完遂のために率先して協力する戦時下の国民生活の理想的な姿勢」を写したものといえます。

記事だけでなく、雑誌の体裁も当時の状況を色濃く伝えています。太平洋戦争以前の表紙は、多色刷り写真が多用されたのに対して、敗色が濃くなる昭和19年（1944年）以降には、質の悪い紙に、ほぼ白黒で印刷されています。また、写真週報第315号以降の表紙には、国民を鼓舞する「時の立札」の文言が付けられました。

雑誌は昭和20年（1945年）7月11日の第374号・第375号の合併号を最後に、印刷所が戦災で焼失したため、刊行できなくなりました。

※展示資料の文章表現について

『写真週報』の記事を使った展示パネルは、内容の一部や写真キャプションを要約するとともに、旧かなづかいや誤字を改め、現代文として読みやすいよう編集を加えています。

なお、説明（記事要約・写真説明文）に利用した部分について

は説明文と比較できるように、紹介した資料写真中に原文を残しています。

また、展示資料には、現在からみると差別や偏見ととられる表現が含まれていますが、歴史的資料という性格を考慮してそのまま紹介しています。あらかじめご了承ください。



『写真週報』

左から順に第136号（昭和15年10月2日発行）・第175号（昭和16年7月2日発行）・第234号（昭和17年8月19日発行）・第333号（昭和19年8月9日発行）



『写真週報』第201号表紙（昭和16年12月31日発行）



『写真週報』の表紙等

第218号（昭和17年4月29日発行）・第316号（昭和19年1月26日発行）・第206号（昭和17年2月4日発行）・第173号（昭和16年6月18日発行）・第119号（昭和15年6月5日発行）の表紙、第148号（昭和15年12月18日発行）掲載のマンガ「宣伝はこうして」

第1章 少女と青春の思い出

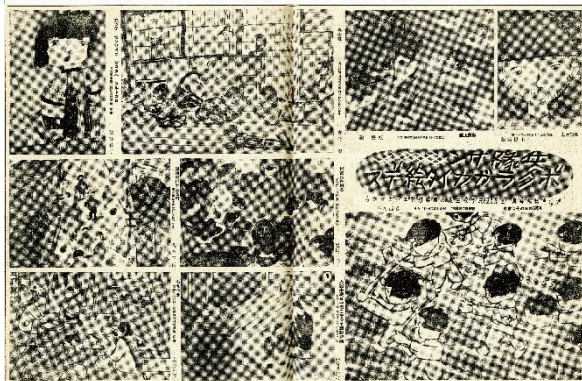
子供たちの描いた絵

『写真週報』第220号の記事「兵隊さん僕らが描いた絵です」は、通信博物館が全国の国民学校生徒に募集した「兵士への慰問絵はがき」を記事にしたものです。それらには、学校の授業を受ける姿や冬の夜の団らん、もちつきの様子といった日常を描いた絵とともに、出征兵士を送る様子や戦場での兵士達の姿、食料増産の勤労奉仕で働く少女たちなどを題材にした戦時色の強い絵が多く見られます。

戦争のころ、武田倫江さんが長浜国民学校（現在の長浜市立長浜小学校）の授業で描いた絵も、「戦車」や「軍艦と戦闘機」、「兵隊ごっこ」、「日の丸に万歳をする少女」など、同じように戦時色の強いものでした。当時は、日本中に戦争の絵が満ちあふれていたのです。

学校では男子と同様に、少女たちも国に奉仕することの尊さや国に命を捧げるすばらしさ、敵国である米国・英国などの卑劣さなどを教えられました。彼女たちは、「良妻賢母」・「愛国婦人」を題材としたカルタや戦時色の強いおもちゃで遊び、勇敢な兵士や強い日本軍の話などが載った子供向けの雑誌や本を与えられました。日常の生活を通して、少女たちは自然と、戦争へと導かれていったのです。

兵隊さん僕らが描いた絵です 通信博物館募集 全国国民学校生徒の前線慰問絵ハガキから



『写真週報』第220号（昭和17年5月13日発行）の記事
「兵隊さん僕らが描いた絵です」（通信博物館募集 全国国民
学校生徒の前線慰問絵ハガキから）より

【体験談：国民学校のころの思い出】

武田 倫江さん（長浜市）

戦時中に長浜国民学校（現在の長浜市立長浜小学校）

に通っていた武田倫江さんの少女の頃のお話です。

あの頃は軍国主義一色の教育だったでしょ。学校の朝礼で校長先生が教育勅語というのを読まれるわけなんです。何が何やら分かれへんのよね、ほんと難しいから。

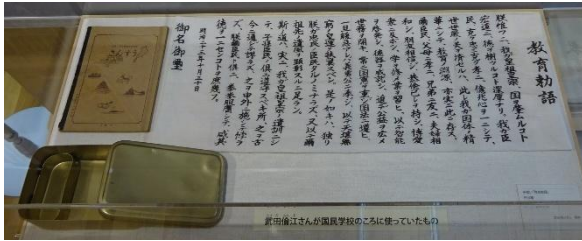
お絵かきの時間も、先生が「戦争の絵描きなさい」とかは言わはったことはないけど、始めからお手本に軍艦の絵なんかを与えられましたからね。「日の丸の旗を描きましょう」とかね。だから、女の子も男の子も戦争の絵を描いたの。アメリカの兵隊さんというの人間じゃないと仕込まれていましたからね。

「鬼畜米英」といって、「獣だ」といわれてましたから。「お国のために」というのが頭からこびりついていましたから、だから、軍艦の絵とか飛行機の絵とか描いたら、先生は二重丸をくれたんです。先生だって軍国主義一色の教育を受けてきてはるから、先生は子供らしさとかそういうのを見てくれなかったわ。

当時、男の子は兵隊さんになるものと決まっていたでしょ。だから男の子の遊びは兵隊さんごっこでした。女の子は看護婦さんに憧れてたんですよ。「傷ついた兵隊さんを看病する看護婦さん」っていうのがね、だから看護婦さんごっことかね、そんなことをしていましたよ。子供でも、戦争という意識が常にありましたよ。

ある時、アメリカに行ってた伯父さんが「向こうはピストルがあるんだよ」と言わはったんです。事実そうなんだけど、その時はその伯父さんを「スパイなんじゃないかな」とか思っていましたよ。子供だからそんなに切実には思ってませんでしたけど、「戦争に負ける」ということは考えませんでした。

戦争と言っても「辛かったなあ」という思いはないんですよ。当時は「それが当たり前」と思ってたから、辛いとかそんなことはなかったんです。日本中が軍国主義一色で、それが当然のような育ち方をしてたから、不自由でもそれが当たり前だと思ってたわ。急に不自由になったわけじゃないから、ジワジワ、ジワジワ、だんだん不自由になって来たから、当たり前だと思ってたみたい。子供というのは順応性がありますからね。



武田倫江さんが国民学校のころに使っていたもの
手拭い「教育勅語」、弁当箱、ノート「さんすう」



長浜国民学校3年生集合写真 [武田倫江さん提供]



絵を描いたころの武田倫江さん [本人提供]



日の丸の旗と女の子 [武田倫江さん・3年生]



兵隊ごっこ [武田倫江さん・1年生]



1・2・3の旗 [武田倫江さん・1年生]



軍艦 [武田倫江さん・1年生]



軍艦と飛行機 [武田倫江さん・3年生]



山と女の子2人 [武田倫江さん・1年生]

軍用ウサギの飼育

ウサギの毛皮は防寒着や航空機パイロットの飛行服などの原料となる軍事物資でした。小学校や国民学校では皮や肉を軍へ供出するため、多くのウサギが飼育されていました。

ウサギ皮の需要が増加した結果、写真週報では「ウサギの皮の総動員」（写真週報第134号）や「ウサギは大切な軍需品」（写真週報第188号）など、軍用ウサギを取り上げた記事が何度も掲載されました。記事の多くは、愛らしいウサギと少女たちの写真を載せ、少女たちもその飼育を通じて戦争に協力していることをアピールするものでした。

戦争中、ぼくの仲間が国民学校でいっぱい飼われてたんだ。大人気なんだ。ペットかな？友だちのKちゃんに聞いてみよう。
え〜！軍用ウサギってなに！！



軍用ウサギの
ピースさん

【体験談：国民学校で軍用ウサギを飼育】

Kさん（彦根市）

Kさんは、城南国民学校（現在の彦根市立城南小学校）の6年生の時に終戦を迎えました。国民学校で軍に供出するためにウサギを飼っていた時の話です。

学校では児童に割り当てて、ウサギ飼ってたんや。私もウサギ飼ってたんやけど、うちはあんまり上手に飼えなんだ。みんな大きいウサギにしはったけど、うちは小さいウサギやったわ。

ほんで、ウサギは晩もえさをやらんならんやろ。下校してからでもね。飼育当番があったんや。「今日は誰、誰、誰」っていうてね。当番が当たると、田んぼを回って、ちゃんとウサギのえさを探さなならんかったんや。「ウサギのえさはどんな草でもええ」いうわけにいかんから。もちろんタンポポとかやったらええけど、そんなんばっかしなくて、よさそうなえさを選ぶんやけど、うちはそういうことが下手くそでな、みんながカゴいっぱいにするのに、まだ半分しか集められてなかったわ。

ほんで、繁殖さして、大きくなったウサギを何匹か出す（供出する）のよ。農業を教えていたキョセ先生が学校内でウサギを処理しはったんや。かわいそうにな、ウサギ処理して、皮むいてな。ほて、そのウサギの皮、兵隊さんに送るんや。あんまりそういうのな、「ちっちゃい子どもに見せるのはあかんで」いうてカーテン閉めとかはったんや。みんなは見たい半分怖い半分でね。教室のカーテンを閉めてはったんで見えへんかったけどな。



城南国民学校（高等科） 昭和20年度卒業写真

〔水野道子さん提供〕



国民学校のかれんな養兔報国
戦地の兵士達に暖かい毛皮を送ろうと、愛知県の堤国民学校では全校生徒一人一匹を目標にウサギの飼育に一生懸命です。ウサギ小屋の手入れからウサギのエサの運搬まで、すべて生徒が行っており、すでに数百匹のウサギを市場に送っています。

『写真週報』第196号（昭和16年11月26日発行）より

兵隊さんにウサギを育てて
捧げましょう

写真週報

昭和15年(1940年)9月16日、ウサギにちなんだ明月のころ、日本軍の兵士達にその身をささげてきたウサギの慰霊祭をかねて、ウサギ飼育のよりいっそうの奨励を行うため、軍免察が行われます。

ウサギの毛皮は防寒具の材料として、肉は食用として軍に供出されてきましたが、戦争の拡大とともにその需要が増加してきており、この行事を契機にウサギの飼育を拡大することとしました。

写真は児童たちだけの手で軍用免を飼育し、その増産に協力している長野県の寺尾小学校のウサギ飼育の様子です。



『写真週報』第133号(昭和15年9月11日発行)より



『写真週報』第188号(昭和16年10月1日発行)より



ウサギの皮の総動員

ウサギの飼育は軍需資源として非常に重要です。小学生の課外授業としても充分に戦後の役割を果たします。ぜひウサギを飼っていただきたいものです。

ウサギ肉は乾燥肉・冷凍肉として中国大陸へ送られ、戦場の兵士達の軍用食となります。毛皮は様々な工程を経て、防寒具に加工されます。

極寒の戦地で兵士達を暖かく包む帽子や衣服もみんなウサギの毛皮が利用されているのです。

『写真週報』第134号(昭和15年9月18日発行)より



もと軍用ウサギの
ピースさん

友だちがみんな供出されて飛行服
になっちゃったよ〜!!

ボクの世話をしてくれている K
ちゃんはウサギの育て方が下手だっ
たので、大きくならなかったボクだ
け供出されずに済みました。

このあとも、みんなといっしょに
戦争中の女の子の話を見ていこうね。



飛行服

陸軍の飛行兵が着用した軍服です。

上空の寒冷な気温から身体を守るため、ポケットまで裏地には大量のウサギの毛皮が使われています。

今回の展示では、使用された毛皮の量を実感していただくため、服を裏返して展示しています。



『週刊少国民』第2巻第9号

(昭和18年2月28日、朝日新聞社発行)

国民学校と学童疎開

昭和16年(1941年)の国民学校令によって、尋常小学校が戦争を押し進める教育を行う「国民学校」に変わりました。そこでの授業は、国が軍国主義を実現するため、国にすべてをささげる国民を育成するものでした。戦況の悪化とともに、そうした授業さえもなくなり、少女たちは食料増産のため、校庭や周辺の空地・農地での農作業などを強いられました。

昭和19年(1944年)、本土への空襲の本格化により、6月に「学童疎開促進要綱」が閣議決定され、大都市の国民学校初等科の児童を疎開させることが決まりました。滋賀県には大阪市から1万人以上の子供達が疎開してきました。

政府が少女たちを疎開させた目的の1つは、将来に渡って日本の兵力・労働力を維持する上で必要な、子供を産み育てる未来の母親として少女達を温存するためでした。



【体験談：城南国民学校での生活】 Kさん(彦根市)

今では考えられへんやろけど、勉強するにしたかて、教科書も新聞を折ったような粗末なものでな。紙がないから、父が商売で使った納品書とか請求書を学校持って行って、裏を使ってね、ノート代わりにしてたんや。

当時は、げたや雨靴で学校に行ったんや。すると、げたの鼻緒が途中で切れて、学校まで行けへんかったわ。雨靴が洒落になったけど、再生ゴムでつくったもので、三日もはいたらもう破れてきて、水が入ってしまう。そんなんやったな。

私の家は畑や田んぼもつくってたから、麦入れたお弁当とかを持って行ったけども、町に住んでいた

人は、メリケン粉を焼いた物やおイモふかした物を持って来てた。まだ、それでも食べられる人はいいけど、お弁当持って来られへん人はお昼の食事の時間になると、どっか行ってしまいはったんや。ある人は空の弁当箱を持って来て、風呂敷で隠して、食べもせんと食べるまねだけしてはったわ。

あの時分の食糧難は、川に流れてくる葉っぱを拾って、飢えを凌ぐようなひどい状態の人もいあった。食料がないから、私らはもう勉強もほっちちにして(ほったらかして)、農場はもちろん、学校の運動場までツルハシで開墾して、豆植えたり、イモつくったりしてたんや。それで、イモのつるまでも粉にして、食料にしたんや。夏休みには、「軍用馬に食べさすマグサを供出せんならん」というてな、草刈り。それを干して、戦場の馬の食料(馬草)を作ってたわ。

それから(昭和20年(1945年)6月26日)、学校が爆撃に遭うたんや。ブーンブーンブーンと、もう不気味な爆音で、編隊組んでねB29が来たんよ。すると、みんなが「ふわあ〜」と見はるくらいね、飛行機雲がチャーツと立って、きれいなんよ。その日は校長の判断で、「警戒警報やけども、おうちに帰りなさい」って、すべて学童を避難ささはったけど、麦畑にいはった人がな、爆風に死なはったんや。

空襲の後、お母ちゃん達が学校を見に行って、「小屋のもういたところに爆弾の破片が刺さってた」っていうてた。もしもあの小屋にいてたら、そこら中、傷だらけやったやろなと思いましたわ。



『写真週報』第359号(昭和20年2月14日発行)より



『写真週報』第277号（昭和20年6月23日発行）

・第279号（昭和18年7月7日発行）より



【体験談：滋賀県への学童疎開】

池田 喬子さん（大津市）

昭和19年（1944年）、池田喬子さんは大阪市から南五個荘国民学校（現在の東近江市立五個荘小学校）に学童疎開されました。その時のお話です。

私たちは大阪市のラシャ問屋で何にも不自由がなく、裕福に暮らしてました。戦争が悪化して、通っていた東区の中大江国民学校（現在の大阪市立中大江小学校）が五個荘の金堂村に疎開したんです。

学童疎開に出発する時は、そらあ、もう、喜んで、意気揚々で行ったわよ。一番いい洋服を着て、旗で見送ってもらって、英雄気取りでした。ほんで、着いた時もね、馴降りると旗振って、手を叩いて迎えてくれはるし、ご馳走はダーッと並んでるし、ほんまに楽しかったんや。ところが、その晩からみんな泣いてた。前日に母が言うたんやわ。炊事場のところからお月さんが出てたんやわ。「明日にはもうこのお月さんを喬子はもうあっちで見るんやなあ」というたから、「なにお母ちゃん、そんなメソメソしたこと言うてんねん」と怒ったけど行ってみたら、ほんま

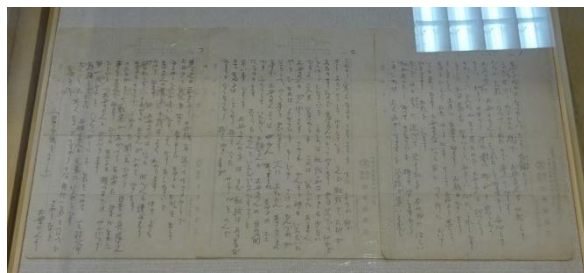
に悲しかった。「帰りたい。帰りたい」、て。

村の人が土地を提供してくださったので、お芋やらを植える場所をこしらえるため開墾したんです。10歳ぐらいの小さな手でね。鍬やらつるはしのようなもので、開墾したんです。

苦労はね、蚤、蚊、ブヨに悩まされたのと、食べ物がないのと、空腹で、空腹で、それに寒さで着るもんがない、靴がないことでしたわ。五個荘村の人達はほんまに心根のいい人ばかりで「疎開の人」というて、別格にしてくれてはったけど、疎開している私たちの仲間が苛めるの。今も昔も一緒よ。きつい子はどこでもきつい。

お風呂はね、寮にできるまでは、マルサンエ場いうてね、挺身隊みたいな女子工員さんたちが入らるお風呂に先に入れてもろてたんです。それで、学校へ行く時に、みんながタオルと湯桶を持って行くの。遠いからね、歩くだけで、おなかが減るの。「大変やから、お風呂に入らしてもらって帰ってきたら、寮で勉強しよう」ということになったの。でもほとんど毎日、作業をしたから授業はほとんど無かったんです。お風呂の薪作りや毎日の自分らの食べる事ばかりで、勉強ってなもん、二の次でした。

疎開が終わって、小松小学校に転入した時にね、もう、最低やってんから。ぜんぜん、授業について行けなんだわ。先生がびっくりしやはったわ。



お母さんから疎開先の池田喬子さんへ届いた手紙

池田喬子さんは、手紙について「疎開先で何度も読み直したため、薄くなった文字を鉛筆でなぞりました。親子の手紙でも、当時は検閲があったため泣き言を正直に書けなかったんです」と話されています。

当時、紙が不足していたため、便せんの代わりに仕事先で手に入れた紙を使って書かれています。



滋賀県に疎開された方々が当時、使っていたもの

紅白のはちまき、茶碗、書道用水差し、糸巻き、ハサミ、大阪市立中大江国民学校徽章



戦争中の子どもたちのおもちゃ

世界名婦かるた（『少女倶楽部』昭和12年新年号附録）、
「大東亜」貿易ゲーム盤、おはじき

学徒勤労動員と女子勤労挺身隊

戦時中、成人男性が兵士として戦場へ送られる一方で、大量の軍事物資を供給するため、より多くの労働力が必要となりました。労働力不足を補うため、学生や未婚女性たちが軍需工場や食料増産に動員されました。

女学生の勤労動員は、昭和13年（1938年）に中学生以上の学生を対象とした年間5日程度の勤労奉仕として始まり、昭和19年（1944年）2月には「決戦非常措置要綱」により、年間を通して軍需工場などで働くこととなりました。

未婚女性の勤労動員は、昭和16年（1941年）の

「国民勤労報国協力令」で、14歳～25歳までの未婚女性に年間30日以内の勤労協力を求める形で始まりました。昭和18年（1943年）9月には、深刻化する労働力不足を補うため、政府が「女子勤労動員ノ促進ニ関スル件」を決めた結果、未婚女性は女子勤労挺身隊として強制的に1～2年の間、動員されて軍需工場などで働くこととなりました。

県内では、彦根市の近江航空工業・近江絹糸紡績（写真週報第310号記事）や大津市の住友金属工場（写真週報第333号記事）、大津市の東洋レーヨンなどの軍需工場へ多くの女学生や挺身隊が動員されたほか、水口高等女学校（写真週報第340号記事）や大津高等女学校などでは、学校内に軍需工場が設けられ、女学生たちが働くこととなりました。



パナー写真：『写真週報』表紙に見る女子の勤労動員・挺身隊

食糧増産のために農地改良工事を行う若い女性たち（第274号、昭和18年6月2日発行）、職業訓練学校で機械実習を学ぶ若い女性（第293号、昭和18年10月13日発行）、兵器工場で働く女子挺身隊員（第314号、昭和19年3月22日発行）、学校に設けられた工場で働く女学校生（第318号、昭和19年4月26日発行）、飛行機の翼を造る女子挺身隊員（第326号、昭和19年6月21日発行）、若い女子工員（第333号、昭和19年8月9日発行）

手前ケース内：『写真週報』（左から第160号（昭和16年3月19日発行）・第292号（昭和18年10月6日発行）・第297号（昭和18年11月10日発行））

左の人形：はちまき「神風」・ブラウス・もんぺ・工具

女子学徒勤労動員の歌

・『女子学徒勤労報国歌隊の歌』第2章

・『ああ、紅の血は燃ゆる』第1章

戦争中、日野高等女学校（現在の県立日野高等学校）の生徒たちは、愛知県名古屋市の岡本工業へ勤労動員に行かれ、飛行機の部品を作っていました。

会場で流れている歌は、彼女たちが工場で歌っていた『女子学徒勤労報国歌隊の歌』と『ああ、紅の血は燃ゆる』です。今回の展示ではそれぞれ第2章と第1章のみを紹介しています。

歌い手：岡田光子さん（日野町）・中島美佐子さん（東近江市）

たち



【体験談：高等女学校が軍需工場になったの】

上村 清子さん（甲賀市）

昭和14年（1939年）、上村清子さんは水口高等女学校（現在の県立水口高等学校）に入学されました。戦争の激化と共に学校も銃後一色となり、昭和19年（1944年）4月になると、一切の授業がなくなり、学校がパラシュートの生地となる真綿作りの工場となりました。

水口高等女学校1年生の時は授業がありましたけど、2年生になると農家へ手伝いに行きました。学校の近くを開墾して、サツマイモとか蕎麦やとかを作っていました。音楽の授業は3年生が最後でしたわ。絵を描いたんも4年生の時に友だち同士で描いたぐらいです。

真綿を作るようになったのは、私が5年生だった昭和19年からやったと思います。長浜から教える先生が来てくれはって、繭がド〜ンと来しました。その繭を大〜きなお釜に下級生が炊いて、それが落下傘になりますねん。まあ、臭かったです。繭を炊くというのは、もう、勉強はぜんぜんなくて、全員で

真綿作りばかりやりました。朝早く学校へ行って、タライに水をくんで、それから下級生がきぼって（がんばって）薪で繭を炊いて。あの当時は学校中がサナギのにおいで、もう臭い、臭い。水口の女学生が歩くと、「サナギくさい」といわれました。

真綿を作るために学校の改装はしませんでした。大きな鉄の鍋を買ったり、タライを置く台とか、腰掛けとか、そんな物は用意されました。廊下は全部ダア〜とタライが並んで、みんなタライの前に腰掛けて並んでいました。だから教室は空っぽ。講堂で真綿をザァッと並べて乾かしました。初めはいやでした。でも、そんなこと言うてられへん時代やったし…。

ある日、私より2学年下の人が「頭が痛い、痛い」と言い出さはった。「くたびれやろ」と先生は取り合わなかったんやけど、倒れはったんや。それで静養室へ入れはったら、急性脳膜炎でその晩、学校で死んでしまはった。それと「胸がえらい、胸がえらい」といわはる人がいて、咯血しやはった。結核やね。やっぱり加重労働やったんやろねえ。

当時は「辛い」というより、「みんなが戦争中で、兵隊さんが戦地に行かばる」そういうような気分でした。それで、みんなが一生懸命やってたと思います。そういうふうに洗脳されていたから。



滋賀県立水口高等女学校校舎〔上村清子さん提供〕



『写真週報』第340号（昭和19年9月27日発行）より



『写真週報』第242号（昭和17年10月14日発行）より

【体験談：戦時下の入試や勤労奉仕】

Kさん（高島市）

私たちは昭和18年（1943年）4月に藤樹高等女学校（現在の県立高島高等学校）に入学しました。入試は筆記がなく、口頭試問だけでした。その時、私にはこんな質問が出されたのです。「口頭試問の部屋の扉を開けて席に座るまでに、アメリカの国旗が落ちていたらどうするか」って。私は「避けて通ります」と答えたのですが、帰ってから先生にそのことをお話ししたら、「踏んづけて来ます」と答えるのが正解でしょう」と言われました。

学校では軍事教練の授業もありましたね。行進の練習でした。先生にも召集令状が来て、校庭でお別れ会をしたことを覚えています。

高等女学校に入って2年生になると勤労奉仕が始まりました。稲刈り、麦刈り、薪運び、暗渠排水の作業などに出かけました。薪運びは、学校から高島の中溝あたりまで歩いて行って、薪を背負って来るのです。軍需用の燃料になると聞いていました。一日、10束くらい。山から丸太の一本橋を渡り、車の通る道まで下りてくるのです。真っ白な細長い袋に弁当を入れ、それを斜めに肩に掛け、予備の草履も下げて。運べない人の分は皆で助け合い運び出しました。

暗渠排水の作業は、今の箱館山スキー場のふもとの湿田なんです。田んぼの中に大きな溝を掘り、排水をよくするために松の枝を埋めたんです。

ほかにも、今津で蚕の餌になる桑の葉っぱを摘みました。小屋のなかに畳3枚くらいの大きな穴が掘

っており、その中へ梯子で下りていって、桑の葉を千切る作業もありましたね。

蚕の臓器の一部分で茶褐色の蛆虫みたいなものを、お酢のような液に漬け、一本の糸に伸ばし乾燥する仕事もありましたわ。ものすごくにおいがきつかったことを覚えています。この糸は、戦地で負傷した兵隊さんの傷口を縫う糸になると聞きました。

【体験談：住友金属工業への学徒動員】

Nさん（高島市）

昭和20年（1945年）2月、私は藤樹高等女学校（現在の県立高島高等学校）2年生の時に堅田にあった住友金属工業堅田工場に学徒動員されたんです。学校から一緒に行ったのは2年全員で約80名でした。学徒動員が決まった時には、「お国の為」ということを教えられていたので、未知の世界に行くように嬉しかったですね。でも、出発の2〜3日前になると、家族と離れるのが悲しくて、悲しくて、行くのが嫌になりました。

工場は寮生活で、持っていけるものは鞆一つ。皆が平等になるようにと、洋服や下着の枚数などが決められていました。工場の奥に寮があり、私たちはそこへ入りました。食事は三食とも工場の食堂でした。勉強というものは全然なかったですね。朝は8時ぐらいに仕事について、終わるのは夕方5時くらいと違たかなあ。仕事はわりかし楽しかったですね。叱られながらもね。

仕事はヤスリで金属を削ってました。磨くというか、細くするというか。それで、エンジンを作っていると思っていたんですけど、本当はどうだったんでしょうかねえ。お風呂も毎日じゃなかったですよ。最後になったらね、ドロドロの汚いお湯だね。

住友金属工業には大津市立女学校や八幡商業学校、滋賀師範学校の方も来てました。それなりに慣れると楽しかったですよ。同じ環境の中で同じような年のものが出て、話が合いますよね。寮では自由でしたし。ただ、お腹がすいたことだけがつらかったです。食事の内容が日に日に悪くなったんです。ご飯にいろんなものが混ざっているから、アゴがだるくなるぐらいかまないと飲み込めないんです。

一度、母が白いご飯を持って面会に来てくれたん

です。田んぼのワラ積みのかげに隠れ、母が、「早く、食べな」と言うんです。何か泣きながら食べていたことを思い出します。涙が出て仕方なかった。「家に帰りたい〜。」と思いました。

私は6月頃に身体を壊して今津に帰りました。急性胃腸炎をこじらせて、盲腸周囲炎になって、ガリガリに痩せました。そんな私を見て、学校に残っておられた先生が「ほんまやっぺんなあ」と言われました。先生も何気なく言わはったんやと思うけど、ショックでしたねえ。「私はみんなからそういうふうに見られてたんやな」と思てね。なんか取り残されたという感じもありましたね。



『写真週報』第333号（昭和19年8月9日発行）より



『写真週報』第293号（昭和18年10月13日発行）より

【体験談：女子勤労挺身隊（近江絹糸工場への動員）】

Mさん（大津市）

私は現在の栗東市に4人姉妹の3女として生まれました。女子勤労挺身隊への召集は農村家庭科の生徒だった昭和19年（1944年）の1月でした。召集令状は、役場の小使いさんが「召集です。ご苦労様です、お体に気をつけて」と持って来られました。

両親に「召集が来た限りは、一生懸命頑張ってお国のために尽くしなさい。」といわれ、その言葉に涙がこぼれました。

彦根近江絹糸工場への動員の朝、門先には日の丸の旗が立てられ、在所の方、婦人会の方、小学校の生徒さんたちが家に来て出発を祝ってくれました。服装は、母の着物を潰して作ったモンペに、役場の人が女子勤労挺身隊と書いてくれた白い襷を掛けました。学校では祈願祭や壮行式があり、運動場には300人あまりの人がいて、君が代を歌いながら国旗が揚げられました。村長さんの挨拶があり、私も挨拶をしました。その時は嬉しさと誇らしさで胸が一杯でした。出征兵士のお見送りとまったく同じで、皆さんが寄せ書きをして下さった日の丸を持って、万歳三唱のなか草津駅へと向いました。

工場での一日は、朝5時起床、6時に食事、ラジオ体操、近江航空歌を歌い、8時から5時まで仕事で、お昼休みが1時間ありました。仕事は落下傘の布になる糸を紡ぐ作業でした。夕食後は、1時間ほど国語やら数学やら、お裁縫やらの授業があり、好きな授業を選んで各教室で勉強することができました。仕事は厳しいものではなく、食事家にいる時より良い物が食べられたので、楽しい毎日でした。

しかし、昭和20年（1945年）7月になると毎日、空襲警報が入り、工場の仕事もその度に止まりました。工場が直撃されたのは7月25日の朝でした。ドカンという音がして、工場は火の海になりました。26日にも空襲があり、沖縄から来た宮城とみこさんという方が亡くなられ、名前が似ていたことから、私が死んだことになっていたそうです。家族にもそのように知らせが行き、私が家に帰るまで死んだものだと思っていたそうです。

私は救護班に配属され、怪我人の手当てから死体の始末までやりました。毎日の空襲で夜はゆっくり寝ることが出来ず、お風呂も入る間がなくて、爆撃の恐怖も伴って、もう死んだほうがましだと思いました。

終戦は工場のラジオで玉音放送を聞きました。挺身隊として工場に勤務していたのは1年8ヶ月でしたが、その間、家に帰ったのは一回だけ、手紙は一度も書くことが許されませんでした。

紡績からの転用工場も 近江航空工業¹ 工場²

【写真週刊】 アメリカの航空生産力に驚かされてはならない。我らには、優秀な労働力の供給源として日本女性が残されている。かつてイギリスの紡績業を圧倒した日本女性が巨大なアメリカの航空機工業を屈服させられないと誰が言えるのか。



『写真週報』第310号（昭和19年2月23日発行）より



女学生の勤労動員



『写真週報』第313号（昭和19年3月15日発行）より

第2章 戦時下の女性と職業



パナー写真：『写真週報』表紙に見る戦時下の女性と職業

昼休みを楽しむ丸の内ビル街の事務職員たち（第120号、昭和15年6月12日発行）、小学校教員養成所で学ぶ戦争未亡人（第125号、昭和15年7月17日発行）、東京―ベルリン間の国際電話の女性交換士（第136号、昭和15年10月2日発行）、ジョホールバル兵站病院の従軍看護婦（第230号、昭和17年7月22日発行）、飛行機を造る女子整備員（第320号、昭和19年5月10日発行）、町工場で働く主婦（第338号、昭和19年9月13日発行）

戦時下の女性の職業

日本軍の兵力は、満州事変当時の昭和6年（1931年）には約28万人であったものが、昭和19年（1944年）には約540万人と19倍以上に膨れ上がりました。兵員増強による産業全体の労働力不足は、男性の代わりとして様々な職種に女性が就労するきっかけをつくりました。

写真週報第294号では「国鉄の現場にも女性の敢闘始まる」として、男性に代わって国鉄の駅改札・車掌業務に従事する女性職員たちが取り上げられています。また、写真週報第125号では、戦争未亡人の経済的自立と小学校の教員不足の解消のために設けられた小学校教員養成所の記事を見ることができます。

戦時下の日本では政府の産業統制によって、戦争遂行に不可欠な機械工業と食料増産を担う農業へ優

先的に労働力を振り分けられました。女性の産業別就業者数は、日中戦争以前の昭和 11 年（1936 年）と戦争末期の昭和 19 年（1944 年）の数値で比べてみると、戦争前まで女性の主要な就職先であった繊維工業と飲食店などの就業者人数が、繊維工業では約 126 万人が約 57 万人へ、飲食店などでは約 95 万人が約 57 万人へと大幅に減少しました。

【体験談：八日市鉄道 初の女性社員】

T さん（東近江市）

T さんは、昭和 9 年（1934 年）に愛知高等女学校（現在の県立愛知高等学校）を卒業されました。呉服店の住み込み店員として働いた後、八日市鉄道（現在の近江鉄道と合併）に就職されました。

八日市鉄道に入ったのは、昭和 13 年頃（1938 年）だと思います。あの時分は戦争も激しくなっていて、男性社員が戦争によけ行くし。それでもう人がないで、女の人を採用しやはった訳や。

八日市鉄道の仕事は本社勤務の調査課やった。各駅から寄って来る毎日の売上げを集計してたんや。切符が八日市鉄道と国鉄といっしょになった連絡切符やったから、その売上げのどんだけを国鉄に払うとか、貨物でもどんだけの貨物の運賃を国鉄の方へ払うとかの勘定をしてたんや。

調査課には男が 7 人、女が 4 人の 11 人程の職員がいたけど、女性社員は私がはじめてやった。女の人が入社に入ってきたのは、戦争がだんだん酷うなあって、男の社員がみんな（戦争に）行ってしまいほるさかい、人手が足らんようになって、女性社員を使いかけはったんや。その時分からやな。女が勤めに行くようになったのは。それまでは、女はお裁縫を習いに行ったり、女中に行くぐらいのことで、事務員は沢山いなかったんや。

昭和 19 年（1944 年）に八日市鉄道と近江鉄道が合併になってよ。本社に勤めてはった人は彦根の近江鉄道の方の本社へみな行かはった。その時に私は彦根へ行かんと辞めたんや。

その年に父親が死にましてん。うちの家はあの時分、家内工業で軍手を織って商売にしていたんや。昭和 19・20 年は大変な年やったんや。昭和 19 年に父さんが死んでね。昭和 20 年にすぐ下の妹が死んで、

別の妹が日赤看護婦として召集で行きましたんや。一番下の妹とおばあさんだけしかいなかったから、家業の軍手をしなしょうがないわな。昭和 20 年頃は無茶苦茶やった。



『写真週報』第 294 号（昭和 18 年 10 月 20 日発行）より



『写真週報』第 290 号（昭和 18 年 9 月 22 日発行）より

【体験談：戦争未亡人の教員養成学校生】

松崎 香苗さん（彦根市）

松崎香苗さんは大正 4 年（1915 年）生まれ。昭和 13 年（1938 年）に朝鮮総督府の役人だった松崎寿吉さんとは結婚されました。

昭和 19 年（1944 年）4 月 23 日、夫に赤紙が来ました。遺品のなかに出征中の日誌があったの。それを読むと、横須賀から 6 月頃に硫黄島に渡ってるんです。魚雷にやられて、みんな泳いで硫黄島に渡ったのだけど、硫黄島に着いたら真水がないのでお腹こわして。10 月に戦病死で亡くなりました。12 月に戦死公報が届いて、遺品と犬歯が 3 本入った小さい遺骨箱が帰って来ました。

両親は「家におったらいいよ」と言うたんだけど、

兄弟が帰ってきたら居づらくなるし。「5歳の子供を抱えて、どうしよういなあ」と思ってね。その時分、軍が戦争未亡人に対して教員を養成するところを作ってくれたの。30歳でしたけど教員になろうと、若い子に混じって京城女子師範学校に行ったの。師範学校は全寮制だったから、子供を親に預けて。卒業してから14年も経ってたから、全然忘れちゃって、他の人に追いつかなくちゃならないから、夜も寝てられなかったの。それに軍事訓練というのがあったのよ。銃を持ってね、匍匐前進しなきゃなんないのよ。いろんなことをやらされたわ。それでね、1か月に10キロも痩せちゃったわ。内地のように食べ物がないというのではなかったけど、でも最後の方には、とうとう、食べるものがなくなって、学徒動員の歌に送られて、みんな親元に帰されたんです。『教育実習』という名目で、親のいるところの学校の先生に教生として行くことになったの。私は朝鮮人学級の一年生を持たされてね。当時の朝鮮の教育は日本語で教えていたのよ。でも、一年生だと日本語をあまり知らないから大変だったわ。

終戦の後、8月19日にソ連が攻めてくるので「もう、だめだから出よう」ということになってね。暑い日だったけれど、着られるだけ服を着て、当座のものをリュックに詰めて、軍用列車に乗せてもらって、10月に主人の九州の実家に帰ったんです。まあ、離れを一問、あてがってはもらってただけど、歓迎されることはないし。そこで、途中になっていた教員への勉強のため、未亡人が入れる熊本女子師範学校に入り直しました。子供も一緒に寮で暮らすことになったわ。その時の費用は軍隊からも、学校からももらわなかったなあ。結局は持って帰ったお金でなんとかしたんだと思うんだけど。それから、翌年に主人の出身小学校の先生になりました。



松崎寿吉さんの遺品

軍隊手帳、貴重品袋、簡易髭剃り、鏡、お守り袋、水天宮武運長久御守



遺児を抱いて教壇に立つ



『写真週報』第125号（昭和15年7月17日発行）より

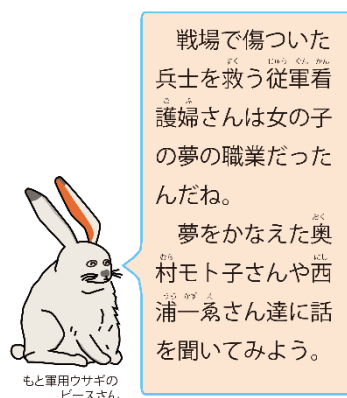
従軍看護婦

戦前の日本では、男性のみが兵役の義務を課せられました。従軍看護婦は、その中で女性でありながら召集令状を受け取り、戦地へ出征したのです。日本赤十字社救護看護婦や軍に所属した看護婦たちは、学費免除の看護婦養成所などで教育を受ける代わりに、卒業後、召集に応じて従軍する義務がありました。召集時、彼女たちは夫や幼い我が子を残してでも従軍しなければなりませんでした。

日本赤十字社は明治10年（1877年）に西南戦争

での傷病者救護のために創られた博愛社に起源をもつ組織で、戦争や災害で苦しむ人々を敵味方の区別なく救護するために設立されました。救護員を最初に戦場へ派遣した日清戦争以降、戦場での日赤の救護活動が日本軍に評価され、従軍看護婦の活躍は軍の医療活動に不可欠なものとなっていました。

写真週報では、戦争での傷病兵に寄りそって兵士の再起を助ける従軍看護婦の姿（写真週報第2号、第54号、第173号など）が何度も取り上げられています。



フィリピンの看護婦さん マニラ〇〇兵站病院

記事要約
病院では200人以上のフィリピン人の看護婦さんが日本の看護婦さんの指導のもとに、簡単な注射や兵士達の身の回りの世話などの仕事を行っている。



『写真週報』第233号（昭和17年8月12日発行）より



腕章 日本赤十字社

写真週報に見る従軍看護婦



『写真週報』第192号（昭和16年10月29日発行）、第42号（昭和14年11月30日発行）、第2号（昭和13年2月23日発行）、第54号（昭和14年3月1日発行）、第173号（昭和16年6月18日発行）より



『白衣の従軍記』（大津赤十字病院 看護婦同窓会発行）、『日本赤十字従軍看護婦 戦場に捧げた青春』第1巻・第2巻（昭和63年8月15日、元日赤従軍看護婦の会発行）、『写真週報』第54号（昭和14年3月1日発行）

【体験談：病院船が沈没】木村 ます さん（野洲市）

私が看護婦になった理由は単純なんです。親に負担を掛けずに進学するため、授業料や寄宿費が無料だった日本赤十字社滋賀支部の救護看護婦生徒になったんです。

昭和18年（1943年）3月、2度目の召集で行った

ラバウルでは、もう空襲が始まってました。最初の頃は空襲があると地下壕へ逃げましたんや。大きな音がしてくるし、焼夷弾を落とされるから。そやけど慣れてきて、最後には空襲があっても逃げませんでした。(空襲中も) 寝てましたね。照明弾を落とされるから、動いてるとよう分かるんですって。隣の宿舎の人に、よう怒られましたわ。「看護婦は空襲中もようしゃべる」とか、「よう動く」とかでね。慣れてくるとね「どこにいたかて、死ぬ時は死ぬんや」という感じになっていました。

ラバウルでの戦闘が始まる寸前でしたんで、11月末に「衛生兵の一部と患者と看護婦は引き揚げよ」ということで、病院船のブエノスアイレス丸に1,300人ほど乗り、引き揚げたんです。ところが、翌朝の11月28日に船が沈められて。私は何とか、患者さんたちで満杯の救命ボートの横に張ってある縄持ちましたんや。これ離したら死ぬわと思ってね。それをずーと持っていましたんや。夜もボートの中へ入られへんで、私らは浮いてました。

3日目ぐらいにものすごい嵐が来たんです。「看護婦さん危ないさかいに中へ入れ」といって、きゅきゅの船内に入れてもらいました。その嵐でロープに掴まっていた兵隊さんたちが200人ぐらいは流されてはと思います。

そして2日ほど過ぎた頃に、今度は敵の機銃掃射を受けたんですわ。飛行機がものすごく低空で、ばあーとみな撃っていくんや。機銃掃射があった後、フカが出てきたんですわ。兵隊さんが私たちを船の中へ引っ張り入れてくれました。そしたら、船の中に11人か12人しかいませんでした。みな撃たれて。150人も乗っていたボートの中が、そんだけの人数でした。

それから、ボートの中でもうのびてましたんや。一週間ぐらい何にも食べてませんやん。水もないんですわ。あくる日、兵隊さんが「敵の潜水艦が来た」といわはったんです。もう、動けへんさかいに「死のうと生きよと、もう、どうぞ」と思いましたんや。それが日本の駆潜艇でした。ボートは助けてもらったんです。



病院船内【木村ますさん提供】



木村ますさんの出征時【木村ますさん提供】

【体験談：助けられなかった多くの命】

木村 ます さん（野洲市）

救助された木村ますさんたちはその後、ルソン島（フィリピン）バギオの病院へ移りました。

マニラが襲撃されて、今度は病院全部がバギオへ逃げたんですわ。バギオは高級官僚の避暑地やったんで、広い花壇や粋な建物がありましたわ。そやけど空襲がひどくなって、山の斜面に横穴を掘って病室にしたんです。

そこも爆撃にあって、病院ぐるみで山の中へ逃げるようになったんです。最初は衣囊を持ってましたが、身体1つで逃げるのが精一杯でした。出発してすぐに患者さんが段々減ってきました。みんな最初の2〜3日ぐらいで亡くなりはったと思います。山の中では水はあったけども、食べ物是不自由しました。出る（バギオを出発する）ときに軍足の片方に

米と塩少々をもらったんやけど、7月に山の中へ入って、終戦過ぎまで山の中にいたんやさかい。

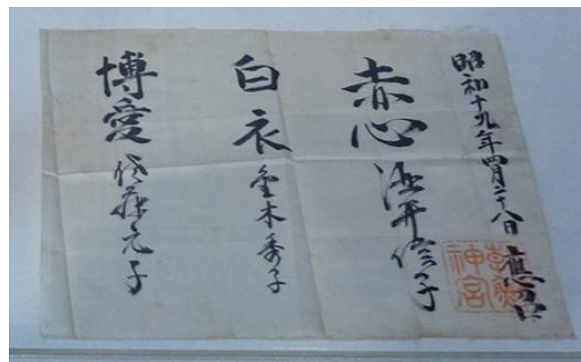
亡くなった人もしょっちゅう見ました。助けたいと思ったけど、注射も何にもないですやろ。助けて一緒に連れて行くこともできなかったんですわ。戦死には違いないけど、あの人らがあんな気の毒な恰好でね、死んではるのがどうにも、どうにもならんのですわ。

終戦の数日後、師団司令部の方から「救護班は本部に付け」という命令がきたんですわ。それで、みんなで山から下りることにしました。爆撃された瓦礫の道をくねくね廻りもって下りてきました。夕方になって、テントがあるとこへ着いたんですわ。その晩は寝ることになったんです。テントの中は、死体と白骨と生きてる者が一緒に寝てたんです。私は白骨のそばの空いたところで寝ましたんや。白骨の人がね、さらの地下足袋履いてはるんですわ。私は壊れたぼろぼろの靴を履いていたので、「この地下足袋が欲しいな」となんぼ思たやわかりませんわ。そやけど、よう脱がせませんでしたけどね。

平地に米軍がいて、武装解除になりました。昭和21年(1946年)10月に日本に帰ってきて、翌年から助産婦開業したんです。生まれた赤ちゃんに着物を着せたり、寝さしたりすると、ふっと思ひ出すことがありますね。「あの人らも、こういうように生命をもらってきたのに、ああいう死に方をしてな…」と思うことがあります。お母さんにそれとは言わんのですけどもね。「命をこうしてせつかく授かってきたんやさかいに、この人を大事に育てんとあかんよ」、て。



ラバウル赤根岬に埋葬された救護看護婦(滋賀班)2名の墓前で
の集合写真
【木村ますさん提供】



寄せ書き(昭和19年4月28日応召)



フィリピンのバギオ市は、夏に涼しい高山にあり、戦前から避暑地でした。

恵まれた環境のバギオには、兵士達を治療する高原の病院があります。ここでは、傷や病気の経過もよく、兵士達の再起に向けて治療が行われてます。

『写真週報』第278号(昭和18年6月30日発行)より

【体験談：フィリピンに派遣された従軍看護婦】

奥村 モト子さん(大津市)

女学校の卒業前に、病院船で働く看護婦さん達の映画を日本赤十字社が学校で上映したんですよ。みんな「看護婦になるんだ」と感激してねえ。軍国の乙女だった私は、父の反対を押し切って日赤看護学校に入学しました。

看護学校を卒業した昭和19年(1944年)4月に召集令状が来ました。当時、従軍看護婦を女の特攻隊だと思ってました。自分の命を投げ出して、日本国

を守っていくことが一番の忠義だって教育されてましたでしょ。女でもそういう気持ちでしたね。みんなナイチンゲールにあこがれてね。「国のため、傷ついた兵隊さん達を自分達で看取ってあげたい」ただそれだけでした。そう教育されてたんですよ。やっぱり教育というものの力は恐ろしい。

従軍してマニラの第 63 兵站病院（フィリピン）に配属された奥村モト子さんたちは、戦況悪化により北部の山間部を転進することとなりました。

9 月になると突然、大空襲が始まったの。それでマニラにあった病院を北部の方の山岳地帯に向かって転進することになったんです。赤十字のマークをつけたら、国際法で安全だと思わよね。でも、日本軍が病院船で武器や兵隊を積んで、病院船を装ってたらしいんです。だから、移動先の病院も狙われるようになったんです。敵機が毎日飛んで来て、朝から夕方までずっと弾を落としてました。

動かせない重傷患者がいると、誰かが病院に残って守ってあげないといけないでしょ。友達が当番として残ったときにね、病院がやられたんよ。爆弾でバア〜ン、と直径が 10m ぐらいの穴が開くでしょ。それが、ダァッ和被ってくるんですよ。だからね、付近に爆弾が落ちると、生き埋めになるんやわ。戻ってくると病院は燃えてて、影も形もなかったの。友達が埋まってて、私ら掘り起こしました。でも、窒息死でした。窒息死するとね、硬直しないんです。クニャクニャしてるんです。だから、脈はなくともねえ、なんか生き返るような気がしてねえ。ほんでマッサージしたり、鷹の爪を気付け薬として口の中やらに入れてみたり、いろいろやってみたけど、駄目だね。

病院には薬品がもう全然なかったの。激戦地から運ばれてくる患者さんにはガス壊疽や敗血症ね、破傷風の患者も多くいました。破傷風はうつるでしょ。だからね、意識がなくなってきたら、まだ死んでなくっても衛生兵が埋めたんですよ。うつるから。そうするとね、野良犬が掘り返して、足やらをくわえて、あんなもん食べるのかなあ。もう、この世の地獄やった。



奥村モト子さん出征時の写真

（昭和 19 年 4 月）〔奥村モト子さん提供〕



奥村モト子さん出征時の写真（京城赤十字病院の仲間と）

〔奥村モト子さん提供〕

【体験談：海軍舞鶴病院と戦後の病院船】

市田 和子さん（東近江市）

市田和子さんは、京都第一赤十字病院に在職中の昭和 20 年（1945 年）3 月に召集されました。日赤救護班 802 班として佐賀県嬉野海軍病院に派遣され、7 月には京都府舞鶴海軍病院に移動しました。

舞鶴ではもう毎日のように空襲があつたんです。舞鶴には海防艦の養成所があつて、空襲で爆破された海防艦から負傷した大勢の若い水兵さんが運ばれてきました。病院は手術室も何から全部、防空壕へ避難していました。裸電球が所々の足元を照らすだけで互いの顔すら分からない防空壕で傷の痛みを訴

える兵士やうめき声で「お母さん」と叫ぶ兵士。この世の地獄でした。薬も底を付き、消毒液のヨーチンぐらいしかなかったため、手当といっても傷にただ包帯を巻くことぐらいしかできませんでした。壕の外には目の玉が 40 cmぐらい飛び出した遺体や片足がない遺体など無残な姿ばかりでした。

8月15日の玉音放送は舞鶴海軍病院の運動場で聞きました。そのあと、負傷兵達を山代温泉の近くの病院へ列車で護送することになり、患者に付き添って舞鶴と山代温泉を往復しました。患者を寝かせて運ぶため、列車の窓の間に担架を渡して、私たちは担架の下を這うようにしてその面倒を見ました。トンネルでは蒸気機関車の煙が窓から入って来て大変でした。

翌年3月に2回目の呼び出し（召集）があり、今度は佐世保へ行きました。佐世保を拠点とした病院船に乗り込み、復員兵の看護に当たることになりました。病院船といっても米軍の貨物船リバティー NH007 号を転用したもので、未処理の機雷の浮遊している海域をくぐり抜け、上海・シンガポール・サイゴンなどへ負傷兵士を迎えに往復しました。船内では引き揚げ途中に祖国の土を踏むこともなくお亡くなりになり水葬された方もいました。

上海から戻った待機中、私は休暇をもらい嬉野へ遊びに出かけたんですが、翌日帰って来たら佐世保港のところに消防車いっぱいあるし、「何があったんですか？」て、聞いたら、「今朝9時に船がひっくり返って」って…。病院船から港へ渡る小舟が転覆し、乗っていた9人の仲間が亡くなりました。休暇を取ってなければ、私も死んでたはずです。8人の遺体はすぐに見つかったんですが、私と同室だった芋田さんだけ見つかりませんでした。1週間後、次の目的地のシンガポールへ出航する日の朝、芋田さんの遺体が運河で発見されました。遺体を茶毘に付して、その日の1時に私たちはシンガポールへ向けて出航したんです。



市田和子さん（昭和21年3月2日撮影）

〔市田和子さん提供〕



市田和子さんたち日赤救護看護婦（病院船乗船前）

〔市田和子さん提供〕



市田和子さんたち救護班一同（舞鶴鎮守府海軍病院第16病舎玄関にて）
〔市田和子さん提供〕

【体験談：国境を越えた博愛の精神】

西浦 一糸さん（甲賀市）

私は「兵隊さんだけでなく、女でも戦場に行ける」と、早くから日赤の看護婦さんになろうと決めていたんです。大正14年（1925年）、18歳の時に大津赤十字救護看護婦養成所に入りました。入学の時に「戦時・異変等で召集があった時は直ちに応召します」といった契約書を書かされました。

主人（武夫さん）と結婚したのは、昭和7年（1932年）の最初の召集から帰った27歳の時でした。私たちには子供がなかったんで身軽やったけど、主人には迷惑のかけ通しでしたわ。長期間の一人暮らしを何度もしてもらうことになりましたさかい。

昭和19年（1944年）7月6日、37歳の時に3度目の召集が来ましたんや。その頃、主人が召集されて台湾に渡っていたし、おまけに直前に父母が相次いで亡くなって、お弔いも済んでなかったんです。この召集は「本当につらい」と思いましたわ。日赤滋賀支部に事情を説明したんやけど、「人員がないから頑張ってほしい」と聞いてくれんで、結局、姉婿に後のことを頼み、救護班の婦長として出征しました。

7月15日に大連へ上陸して興城陸軍病院で終戦を迎えたんや。次の日から衛兵が厳しく警戒していた病院も荒らされっぱなしでした。たった一日で、何もかも変わってしまったんです。その後も私たちは顔や首に鍋炭を塗って、男の格好して患者の看護に当たってたんです。

そんな時、「10月10日、ソ連の革命記念日に催しがあるはず。ソ連の部隊から、接待を要求してきたら、誰かを出してくれるように」と、滋賀班に命令が出たんです。あの日の心境は、絶対に忘れられません。「誰かを出さんならんのなら、皆でこれを飲んで死のう」と、部隊長から貰った青酸カリを一人一人が握りしめました。不思議に死ぬことを恐ろしいとは思わなかった。幸い、事なく終わりましたけど。

その後、西浦さんたちはソ連軍に代わって、地域を勢力圏に収めた八路軍（中国共産党軍）に請われて、従軍することとなりました。

終戦後8年間、私達は八路軍で献身的に傷病兵の看護に当たりました。それは「国境を越えた博愛こ

そが赤十字精神である」と思ったからなんです。

私が懐かしい故郷に帰ってきたのは、昭和28年（1953年）8月11日のことでした。その後は、私を待っていていた夫が82歳で亡くなるまで二人で仲良く暮らしました。



従軍看護婦の西浦一糸さん〔西浦一糸さん提供〕



西浦一糸さん関係資料

ノート、支那事変従軍記章、赤十字徽章、華北解放記念徽章、解放奨章徽章、解放華中南記念章、分娩補助道具、注射器、ハサミ、鞆、寄せ書き日の丸



出征時の西浦一糸さん（県庁前にて）〔西浦一糸さん提供〕

第3章 満州へ渡った女性たち 満州開拓と滋賀県満州報国農場

昭和6年（1931年）、日本軍は満州事変を起こし、その翌年には満州（現在の中国東北部）に「満州国」を建国させ、地域を実質的に支配しようとしていました。

昭和7年（1932年）以降、政府は食料増産などの目的で、多くの人々を開拓移民として満州へ送り込みました。写真週報には、希望のフロンティアである満州に若者たちを誘うため、「満州に渡る娘達」（写真週報第125号）・「気持ちよかった満州の汗」（写真週報第284号）や、開拓団の男性に嫁ぐ若い女性達（写真週報第254号）など、満州開拓にその身を捧げる若者達を取り上げた記事が数多く掲載されました。

滋賀県満州報国農場は、昭和19年（1944年）に滋賀県とその外郭団体が政府の意向を受けて開設しました。中国東北部の琿春（現在の中国吉林省延辺朝鮮族自治州）に造られた農場では、青年学校を通じて募集された県内の若者たちが勤労奉仕団として約半年の期間、派遣され農作物の栽培に従事しました。

昭和20年（1945年）8月9日のソ連参戦によって、滋賀県報国農場第2次勤労奉仕隊員たちは、筆舌に尽くしがたい困難状況のなか、帰国することとなりました。

気持ちよかった満州の汗 満州建設勤労奉仕隊女子青年隊

将来、大陸に渡り満州建設に身をささげようとする若い女性250名が全国から選ばれ、満州建設勤労奉仕隊女子青年隊員として1ヶ月間、満州の開拓団などで奉仕活動を行った。



『写真週報』第284号（昭和18年8月11日発行）より



『写真週報』第125号（昭和15年7月17日発行）より

【体験談：滋賀県満州報国農場の教師】

神戸 幸子さん（米原市）

昭和20年（1945年）5月6日、息郷青年学校の教員だった神戸幸子さんは校長先生の勧めもあり、青年学校在籍中の報国農場奉仕隊員に授業を行うため、満洲へ派遣されました。ところが終戦間際の8月9日、ソ連軍が農場付近に侵攻してきたため、場長代理の先生と共に、奉仕隊員達を率いて過酷な避難を強いられました。

朝の9時頃に兵隊さんが「ソ連が越境してきたから、直ちに待避せい。琿春の手前のトチュン川の橋を12時までに渡らなければ爆破するぞ」というんです。農場から15kmの道を2時間くらいで行かないといけないんで、私が連れて行った女子隊は走りつめでした。暑い中、近郷の開拓団や他の日本人が全部集中してくるから、すーごい土ぼこりの中をね。集団で何千人という人達が琿春の橋を目指して逃げる。もう、ぎーりぎりだったんです。「今、爆破する

で渡れ」言われて、かろうじて渡って、ふり返った時には、ぼーんと橋が落ちてました。

私達が乗った汽車は薄暗くなる頃に出発しました。ソ連兵が焼いたんか、農場の方をみると、もう火の手が上がってました。汽車が着いた北山では、小学校に避難しましたが、15日にはソ連軍が来て、私らがいた小学校を接収しました。次の避難場所の朝鮮人学校には、酒に酔ったソ連兵が来るようになったんです。「マダムダワイ」（女性をさらって行く）ということをやらかしたんです。男子生徒が「これは僕の家内だからダメだ。」といって抵抗すると、ぼーんと殴られるんです。で、みんな一斉、「コミンダルト、ゼントルマン」と壁を叩いて騒いだんです。「お偉いさん」ということらしいですね。男子隊員も入れるともっと大勢になりますね。わあーとね。そしたら、詰所からソ連の女性将校さんが出てきたんですわ。それで手離して逃げて行ったということもあったんです。

でも、とても女性 44 名の身を守ることができないと、隣の満人小学校に移って、校舎の床下へ女子だけ入ったんです。その晩に初めて、ぐっすり寝られたんでしょうね。伊吹の山と母の顔を夢みしました。

あの頃は、自分らが 1 日 1 日逃げるだけで精一杯でした。ソ連兵は日本人の持っている時計、万年筆をものすごく欲しがります。私もすっかり油断して、はめてる時に時計取られました。銃を突きつけて、手上げさせられますからね。時計で命拾いする。そんな目に 2 回ほど遭いましたね。



神戸幸子先生

〔神戸幸子さん提供〕

【体験談：中国内戦に巻き込まれて】

神戸 幸子さん（米原市）

吉林まで避難した神戸幸子さん達は、滋賀県出身の炭坑技師の紹介で満洲国軍の将校官舎に身を寄せ、冬を安全に越すことができました。昭和 21 年（1946 年）4 月 26 日になると、吉林周辺はソ連軍に代わって中国共産党軍の勢力圏となりました。

今度は共産党軍が幅を利かしてきたわけで、軍事部官舎も摂取されてしまいました。私達は奉仕隊を崩さずに、駅近くの店へ移動したんです。軍事部官舎の中で、若手でしっかりしておられた西さんという方が私達の責任者みたいに付いて来て下さったんです。男女の隊長みたいにしていね。その方にお世話になって、昨年からの巻きたばこや納豆を売る商売の近江屋も再び始めました。

共産党軍が日本人の若い女の子が集まっていると聞いて、軍の看護婦と造幣局へ使役に来てくれんかと声を掛けてきました。当時、向こうの娘たちは学校へ行ってない人が多かったんで、日本の女性を重宝したんです。そこで、「私らは日本へ帰りたいんだから、共産党軍が何かあった時は私らを解放してくれるか」という条件付で、二手に別れて働くことにしたんです。造幣局は軍の施設で心配でしたので、私も 15 名の隊員と一緒に行くことにしました。そして、看護婦の方は年配の責任者にみてもらいました。男子は使役（雑役）とか、近江屋で働きました。病弱な女子隊員だけは留守居役にしといて、元気なものが働くことにしたんです。

共産党軍は、大事にしてくれました。白いご飯は食べたいだけ食べられるし、女子職員の帽子とか服もちゃんと支給するようにはかってくれました。ところが、働きに行って 10 日程した時だったかな、今度は蒋介石の国民党軍が攻めてきたんです。それで、共産党軍が不利になって奥地へ逃げることになったんです。これは大変だと思って「私らは帰してくれ。」といったんですが「帰さない。」と宿舍の前に歩哨が立つようになったんです。

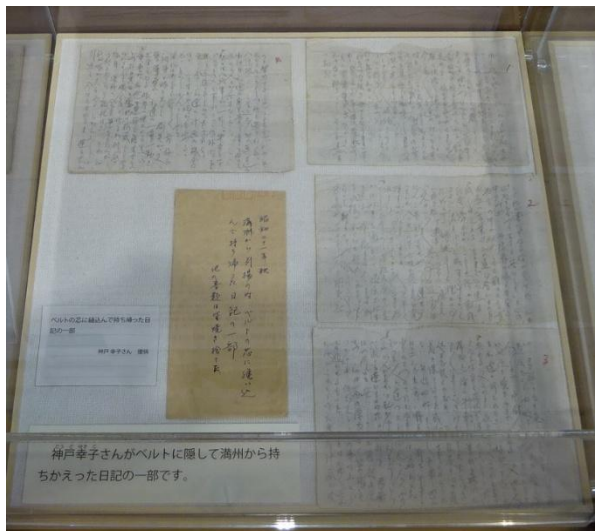
その後、神戸幸子さん達は、撤退する共産党軍から危機一髪のところ脱出し、昭和 21 年（1946 年）10 月 15 日、日本へ引揚げることができました。

滋賀県報国農場の女子奉仕隊員は引揚げ途中に、病

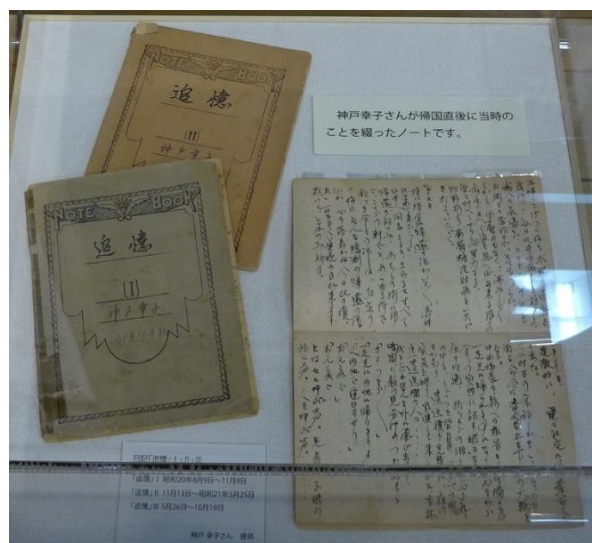
気で4名の方がお亡くなりになり、故郷に戻れたのは40名だけでした。各県の満洲報国農場のうち、組織を保ったまま帰国できたのは滋賀県隊だけでした。その奇跡は、神戸幸子さんの努力によるところが大きかったといえます。



滋賀県満洲報国農場 第二次勤勞奉仕隊の
女子隊員と神戸先生 [神戸幸子さん提供]



ベルトの芯に縫込んで持ち帰った日記の一部
神戸幸子さんがベルトに隠して満州から持ち帰った日記の一部です。



神戸幸子さんが帰国直後に当時のことを綴ったノートです。

日記「追憶」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

- ・「追憶」Ⅰ 昭和20年8月9日～11月9日
- ・「追憶」Ⅱ 昭和20年11月13日～昭和21年5月25日
- ・「追憶」Ⅲ 昭和21年5月26日～10月19日



旗「報国農場勤勞奉仕隊」・「第十三遣送團第二十五大隊第六中隊第三小隊」、

【体験談 滋賀県満洲報国農場勤勞奉仕隊】

吉川 イシさん（野洲市）

私は青年学校3年生の春に、先生が「半年したら帰れるし、行かんか？」とせんど（何度も）いってくれはったんで満州に行きましたんや。県庁に集まって兵隊さんのように旗振ってもらって送られたんですわ。その頃は「戦争に勝たな！お国のためや！

女でも勝つまでは！！」と思ってましたから。

満州は良い所やとは思ってへんかったけど、農場の宿舎にはランプが一つあるだけで、水も井戸にバケツを持って行って、壺瓶に汲んでたんです。水がないから、お風呂は一週間に1回ぐらいしか入れませんでした。夜も泥の上にアンペラ（布）が一枚敷いてあって、そこで寝てました。男の人らは牛や馬やらを使って、耕作しはったんや。耕地にジャガイモを植えたり、大豆を蒔いたりしてた。大きい畑やったから、向こうの方がかすんでた。

故郷が恋しくて、晩になったら、泣いてはる人もたくさんいましたんや。私も「こら、かなわんなあ～」と思って泣いてたけど、「半年や」と思ってたからなあ。

昭和21年（1946年）の秋、吉川さんは神戸先生たちとともに無事、満州から滋賀県に帰り着きました。

行くときは、県庁でみんなが壮行会をしてくれはったけど、帰って来たときは、もう誰一人迎えに来てなかったわ。「ご苦労さんやったなあ」ぐらいは言って欲しかった。



吉川イシさん（報国隊出発時の写真）

〔吉川イシさん提供〕



県庁前での報国隊記念写真

〔吉川イシさん提供〕

吉川イシさんは前から2列目の右から2人目、神戸幸子さんは同列の左から5人目



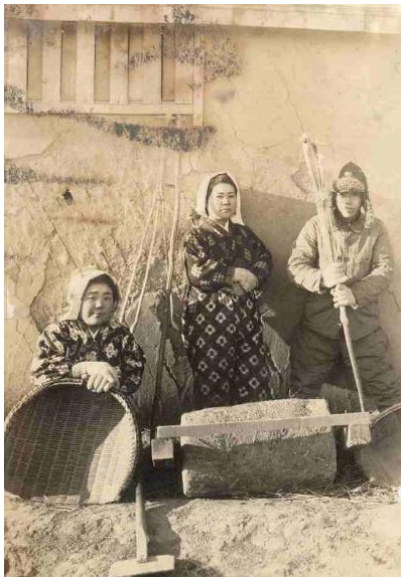
滋賀県満州報国農場の職員

〔上村清子さん提供〕



報国農場 畦たて作業風景

〔上村清子さん提供〕



作業中の第一次勤労奉仕隊員〔上村清子さん提供〕

【体験談：八路軍の看護婦】 Kさん（湖南市）
Kさんは、新潟県出身の大正8年生まれ。昭和19年（1944年）に満州の西火利報国農場へ行き、満州で終戦を迎えられました。

報国農場の団長が来てね。「新潟村の開拓団が満州にあるから、そこへ行って良かったら向こうで結婚してもええし」ということで、行こうと決めたんです。8月15日までは普通の生活をしてました。でも、負けたとなったらみじめなもんでした。逃げて行くところもないしね。匪賊が出てくるので、隠れてた。娘がいたら強姦されたり、引っ張って行かれたりするからね。

避難途中、列車でハルピンに着いたんです。列車に乗っていた者が全員、八路軍（中国共産党軍）に連れて行かれました。自分の意志ではなかったけど、八路軍に入りました。八路軍に参加してから看護婦になったんです。

瀋陽の東北工人病院というところに連れて行かれて、経験はないんだけど、医者がみな日本人だったから。看病しながら毎日看護婦の勉強をしました。国民党と戦った時には、患者の治療のため前線の野戦病院にも行きました。弾がビュービュー飛んでくるけど、潜り抜けながら治療してましたわ。

その後、Kさんは、同様に八路軍に参加していた男性と病院で知り合い結婚され、昭和28年（1953年）7月に2人で帰国されました。



看護婦時代のKさん（前列右から2人目がKさん）〔本人提供〕

第4章 戦時下の結婚・出産・育児



バナー写真：『写真週報』表紙に見る戦時下の結婚・出産・育児

傷痍軍人と婚約者（第188号、昭和16年10月1日発行）、
出征兵士の妻と子供（第166号、昭和16年4月30日発行）、
戦争未亡人と子供（第137号、昭和15年10月9日発行）、
赤ちゃんは未来の兵隊（第269号、昭和18年4月28日発行）、
三つ子の兄弟（第337号、昭和19年9月6日発行）、

『写真週報』に掲載された保険や栄養剤の広告（第118号、第141号、第161号、第162号の裏面）

戦時下の結婚と出産・育児

戦時下の日本では、「産めよ増やせよ」のスローガンにみられるように、戦争に勝つために必要な「人的資源」の質的・量的な拡充が国家目標に掲げられ

ました。背景には日中戦争の長期化に伴う男子の大量出征で、昭和14年(1939年)には出生数が2年前より50万人余りも減少したことなどがありました。

昭和13年(1938年)に誕生した厚生省は「子供は国の宝」として新生児の死亡率を下げるための乳幼児の検診指導や育児思想の啓発などの取り組みとともに、婦人1人当たりの出産数を増やすため、多子多産の奨励を行いました。写真週報には「強く育てよ御国のために」(写真週報第125号)や「輝く子宝日本一」(写真週報第245号)など、出産奨励や乳幼児の健康管理を取り上げた記事が数多くみられます。また、出産の前提となる結婚についても、政府は「結婚奨励に関する件」などにより奨励しましたが、結婚費用については「123点の花嫁御寮」(写真週報第211号記事)にみられるように、国民に徹底した削減を求めました。

婦人たちは、国のための多産を求められながら、夫の出征や食料配給の不足、生活のための過酷な労働など、厳しい環境のなかでの出産・育児を強いられました。

123点の花嫁御寮

和歌山県

衣服の購入に切符制度(購入券の点数分しか衣服を買えないしくみ)がはじまり、豪華な花嫁衣裳を買うような心遣いがいはイヤでもできなくなりました。娘さんが婚約すると、500点分の衣料切符がもらえますが、戦争中であることを考慮して、できる限り衣裳にお金をかけないようにしましょう。

和歌山県の漁村の結婚式では、既存の衣裳などを使い、123点分の衣料切符で済ませました。これが戦争中の結婚式のお手本です。



『写真週報』第211号(昭和17年3月11日発行)より

【体験談：新婚6ヶ月で出征し、帰らぬ人となった夫】
木村 より さん(野洲市)
木村よりさんは大正12年(1923年)生まれ。夫の嘉蔵さんが一時帰宅されていた昭和18年(1943年)2月にご結婚されました。

花嫁衣裳は、親戚が呉服屋をやったんで、両親が衣料キップを集め回って、訪問着を作ってくれました。その訪問着にエプロンをして、それが花嫁衣裳でした。

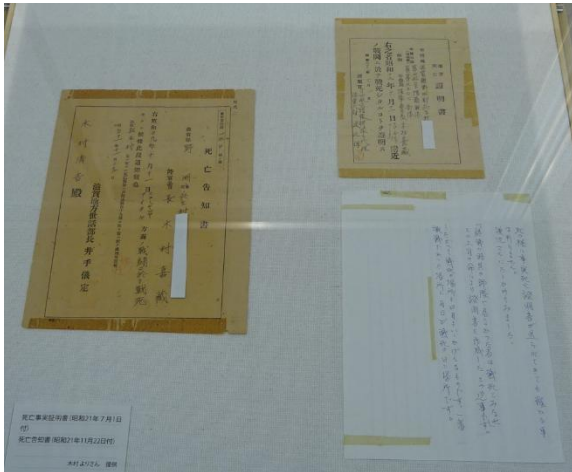
うちの人と一緒に暮らしたのは6ヶ月だけでした。8月15日に召集されて、しばらく内地にいたんです。12月に子供を産んだ時に休暇で帰ってきて、翌年の1月末にもう一度帰ってきて、それが最後でした。せやから、2回、子供の顔は見てるんです。

昭和20年(1945年)8月が終戦でっしゃろ。当時は負けたことが悔しくて、悔しくて、でも「やれやれ、これで帰ってきはるわ」というのが正直な気持ちでしたわ。外地に行かばってから一遍も便りが来なかったんで、生きてはるんか、死んではるんか、わかりませんでしたけど。そんなにすぐには帰られへんから、「まだやなあ、まだやなあ」と言いながら、その年はおとなしく待ってたんです。

昭和21年(1946年)11月25日、戦死公報がきました。「昭和19年10月11日ニューギニアアイタペ方面の戦闘において戦死」と書かれていたんですが、戦死公報が来る前に、「サルミとか、トムとかで、19年7月1日に死んだ」という内容の内報が二度ほど来てたんです。それで、送り主の同じ部隊の大尉に「内報と、公報とどちらが正しいんや」と聞き直したんです。そしたら、内報は私信やから、この公報が正しいという証明書が来たんですわ。「ほんなんやったら、最後も知ってはるんですか」と聞いたら、「そんなことは何にも知らん、終戦の時に、この部隊にいなかった者は戦死にしとけ、と上司に言われて、戦死にした」て、言うんです。遺骨として送られてきたのは、箱に入った木の枝だけやった。

そんなんで、信じられへんでずっと待ってましたんや。そやけど、帰ってきやしませんので、仕舞いに「あ〜、死にはったんやなあ」と思て。昭和61年(1986年)にニューギニアに行ったときにね、一緒に行った人が「どこかに、お父さんとうよう似た子供がおれへんかなあ」って冗談言うてはったけど。





木村嘉蔵さん関係資料

左：死亡告知書（昭和21年11月22日付）、

右：死亡事実証明書（昭和21年7月1日付）

【体験談：2度届いた夫の戦死公報】

田中 もと さん（大津市）

私は青年学校を卒業した19歳の春に京都へ女中奉公しましてね。為三郎が満期除隊した直後に、私も奉公辞めて、家へ帰って結婚したんです。昭和13年（1938年）3月末に結婚式して、5月15日に召集が来たんですわ。当時は村で召集来た人はみな、南郷から汽船に乗っていかはった。村の人や婦人会とかが「バンザイ」で、送りました。そして、大阪港から船で中国へ出発しやはったんです。田植えの最中でしたけど、「明日、中支（中国の華中地域）に出発しやはるから面会に來い」ゆうて電話をいただいて、最後の別れに行きました。

その後、部隊は中国からフィリピンへ行く途中のバシー海峡で船が転覆してね。主人は助けられてサンフェルナンドゆうとこへ上陸しはったんや。主人から来た1枚の検閲ハガキからフィリピンに着いたということが分かったんです。その頃には娘の満里子は生まれてました。

終戦後も夫の為三郎さんは復員されませんでした。昭和22年（1947年）7月5日、もとさんの元に「昭和19年9月21日、比島バブヤン海峡方面の戦闘において戦死」と書かれた為三郎さんの戦死公報が届きます。

フィリピンへ輸送中の船が転覆して戦死という夫の戦死公報が来ましたんや。ハガキがフィリピンか

ら来てるので違うはずやと思って、生きて帰って来やはった人に主人の生死を尋ねに行っただす。そのお方の話でフィリピンに上陸したことが分かったんや。7月9日に県の世話部へ行って訂正を依頼したところ、しばらくして「昭和20年3月21日、ルソン島アッテンポロ方面の戦闘において戦死」と書かれた2通目の戦死公報が届きましたけど、主人がいつ帰って来やはるのやと待ってましたね。引揚げ船が新聞に載るたびに、もう帰って来やはるかな。次の船かな、次の船かなと思ってね。

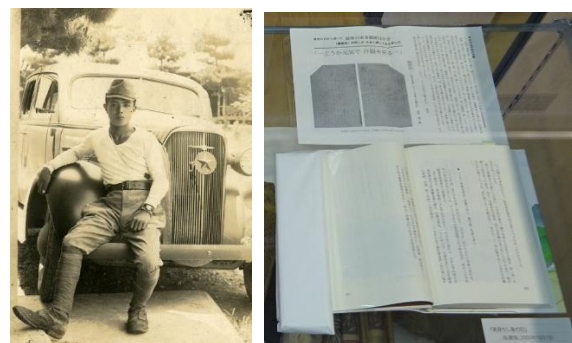
昭和24年（1949年）10月7日に遺骨が帰ってくるという知らせが支所からあって、お寺へ安置された遺骨箱を父と娘の満里子が迎えに行きましたんや。

「お帰りなさい。ご苦労様でした。」とお祈りのあと、恐る恐る蓋を開けたら、中からコロリと木片が出てきた。もう、言葉にはなかったな。

主人は南京へ行かはったらしいです。少尉さんと一緒に食糧探しに歩いてはったということも、友達に聞いたんですけど。やっぱり勝手に行動することができないんで、要領よう山奥へ逃げるのができなんだやと思います。とにかくまじめな人でしたさかいな。



為三郎さんのフィリピンへの出征写真〔田中もとさん提供〕



田中為三郎さん〔田中もとさん提供〕、『君発ちし後の記』（2005年10月1日発行、私家版〔田中もとさん執筆〕）



田中為三郎さんの遺品

軍帽（陸軍）、勲七等青色桐葉章、煙草ケース、田中為三郎さんから田中もとさんへのハガキ（年月日不明）

【体験談：満州に嫁いだ花嫁】 Sさん（日野町）

青年学校の先生に満州の開拓団の方がお嫁さんを探してはると聞いて、兄も行きたがってた満州へ「いいってもいいなあ」と思いました。それで、後先も考えんと、女子拓殖講習という満州の花嫁募集のための講習会に行ったんです。国策のお話を聞いて、満州の映画とか見て。まあ、いろんなことをしてねえ。その時に新聞記者に喋った「鋤を銃剣に変え、兄の代わりに満州開拓団はこの私が・・・」というのがね、新聞に出たんですわ。そんな訳で、どうしても行かんらんようになってしもたんです

秋の終わり頃、先生に呼ばれて行ったら本人さんが来てはりました。大津から義勇隊で満洲に行って花嫁をもらいに帰ってはった主人の熊川正雄でした。翌年の昭和19年（1944年）3月8日、県の方が結婚式を近江神宮でしてくれて、3月15日に満洲へ出発したんですわ。兵隊さんを送るのと同じように、旗をふって駅まで送ってくれはりました。「挨拶せえ」と言われて、まあ、「満洲の土になります」と言うたことだけは覚えてます。

黒龍江省の紫苑義勇隊開拓団に着いたときはねえ、親が反対した満洲に来て、バチが当たったんやと思いましたね。見渡す限り草原は、降った雪がまだ凍ってましてんわ。開拓団の部落はランプ生活で、60人ぐらいの若いお方が三班に分かれて暮らしてました。お嫁さんは私が二人目でした。今までは、皆自分らでしたはったのに女が来たというのでね、炊事から何から、皆ほったらかしてねえ。で、20人の世話をすることになりました。ずいぶん虐められたわ。せやからね、妹がね、便りでね「私も行きたい」と。

それで、「あんたの来るとこやない」と手紙書きましたわ。

昭和20年（1945年）5月に主人に召集令状が来たんですわ。主人が召集で行くときには大きなお腹をしてました。8月8日が予定日やってんけど、初めてやで、なかなか生まれんかったんです。そしたら、12日にソ連が参戦したので、逃げたんです。避難途中に元病院の避難民収容所で産みました。

関東軍官舎で避難生活してましたけど、「本部集合！」と言われて、使役で行くとね、ソ連兵が一杯いますのや。「子ども、放っぱいて、来なさい」と言わはったんです。案外、子どもが助けてくれました。この子をおんぶして行っただけで、強姦されずにすみしました。

その後、Sさんとお子さんは、昭和21年（1946年）10月20日に無事に満州から滋賀へ戻られ、夫のMさんもその後、復員されました。

【体験談：満州からの引揚げ途中での出産】

河原林 光子さん（草津市）

河原林光子さんは大正11年（1922年）生まれ。張家口（現在の中国内蒙古自治区）の日本人小学校で教師をされていた昭和19年（1944年）9月9日に、居留民団の厚生課長をしておられた河原林勲さんと結婚されました。

私は終戦の8月20日が予定日で、大きなお腹をしてたんです。その日、小学校の校庭へ、「みんな、集まれ」ゆうので集まったんです。防空壕へでも入るつもりで集まったんですが、引き揚げでした。トランクひとつに子どものおむつや着せるもの、へその緒を括るもんから切るものまで全部詰めて用意してたんです。「これがありゃせん赤ちゃんが産めません。」ゆうて、それだけは放しませんでした。男の人は前日に全員召集が掛かったんですが、偶然うちの人が帰ってきたんです。だから、一緒に帰れたんです。

私たちが乗った列車は石炭を積んで運ぶ無蓋車で、人間だけ一杯詰めた貨車がいくつも連結してありました。夕方になって雨が降ってきたら、後ろの方の貨車から「産婆さんの経験がある方は、いらっしやいませんか。」という大きな声が聞こえるんです。

生まれそうな人がどっかにいやはることが判りました。その人は双子を生まはって、取り上げる人も誰もいなくて、雨に打たれて亡くならはったということの後で聞いたんです。私は「まだ、出てきたらあかんで。」と一生懸命祈ってました。

私は飲まず食わずで4日間乗ったままでしたんや。そやから陣痛がうまいこと来いしまへんのです。自分もりきむ力がないし、りきんでも、りきんでも出えへんのです。天津の手前で列車が止まりました。そのおかげで、未だにどなたか分かりませんが、産婆の経験のある人が来てくれはったらしいんです。私は主人の手を握って頑張りました。無蓋車の人の大勢のところではなくてよかったと思います。りきんで、りきんでようやく「あ、出た。よかった。」と思ったのに、泣き声がしませんのや。お産婆さんが赤ん坊のお尻をパンパン叩かれたそうで、大分経ってからおぎやと泣き声をあげたそうです。その後、気が付いた時にはトラック内の担架で寝ていたのを覚えてます。天津の日本赤十字病院に連れて行ってもらい、赤ちゃんも産湯を浴びることが出来ました。私らは引き揚げ船に乗って、日本に着いたのは11月3日です。

出産という一大事の時に私を助けて下さったお方、命の恩人なのに、どこのどなたか全く分かりません。だから毎年終戦日が来て地藏盆になると思い出して手を合わせています。

【体験談：産めよ増やせよ】

西川 よの さん（日野町）

私はね、昭和15年（1940年）10月8日に日野高等女学校（現在の県立日野高等学校）4年生で仮祝言を挙げて、卒業して翌年の4月に正式にこの家へ寄せてもらったんや。

昭和17年（1942年）2月に長女を産みましてん。そして、上の子の誕生が来んうちの翌年1月4日に次女を産んで、その年の12月10日に3人目を産みましてん。ほんま忙しい、忙しい。

家はお父ちゃん（夫の西川源太郎さん）と2人やったさかい、お産はみんな、自分で場（出産場所）をこしらえて（用意して）1人で産んだんや。『ぼろそ』（布団のボロ切れ）やらを熱湯消毒しといてな。

油紙を敷いて、その上に『ぼろそ』敷いてよ、その上で産むんよ。お湯（産湯に使う湯）は沸かされへんわ。お父ちゃんが産婆さん呼びに行って、帰ってから沸かしはった。そんなすぐに生まれへんから。ほんで、親元のお母さんに電話せんならん。そんなことをみんな1人でしたのよ。17才で。

長女が2歳の時に脊椎カリエスにならはってな。歩けへんでよ。お父さんが役場へ出勤する時に小学校へ連れて行って、帰りは私が迎えに行って、おんぶして帰ってきてたんよ。6年生まで学校の送り迎えしてたんやけど、腹膜炎で死なはった。体操はでけへんけど、字はきれいやし、賢い子やってん。お父さんがおんおん泣かはったんは、あの子が死なした時だけやったわ。

昭和20年（1945年）5月にお父ちゃんへ赤紙がきて、戦争にいかはってん。私は8月に産まれるから、いかい（大きい）腹してたんや。お父ちゃんは役場で農業教える指導員をしてはって、駐屯する兵隊さんに農業指導してはったんや。それで召集は来んと安心してたのに。

8月12日はいかい（大きい）腹して、朝から野菜やら採りに行っててん。もんできて（戻って来て）よ、昼前から痛とうなってきたで、こらお産やということな、場をこしらえて（出産場所を用意して）、それから産んだんや。その時に、外出許可が出たゆうて、お父ちゃんが帰って来はってん。でも、その子は未熟児でな、死なはったんや。晩にぼんさん（お坊さん）に来てもうてよ。それが12日やろ。15日は終戦やったんや。

『産めよ増やせよ』て、苦勞して7人産んだけど4人亡くなって3人や。半分も残ってへん。10人くらい産んだ家もあるけど死なさんとみんな育ったるというのは、まあ、ないわ。とにかくもう必死やったな、子育ては。



西川よのさんが戦争のころに使っていたもの

眼鏡（ケース付）、足袋、裁縫箱、スター紐（赤・白）、仕付け

糸、縫い糸、巻糸



左：日野高等女学校時代の西川よのさん〔西川よのさん提供〕

右：婚礼時の西川よのさん〔西川よのさん提供〕



西川源太郎さんの出征時の寄せ書き日の丸の写真

〔西川よのさん提供〕



強く育てよ 御国のために

かわいい産声があるたび、新しいアジアの創造を次世代に引き継ぐ宝が増える。赤ちゃんを国民として立派に育てあげることが戦後を預かる母親としての役割である。大阪市では乳児の健康診断や育児相談会を開いている。また、たくさんの子供を育てた母親には「名誉の子宝賞」を贈り、戦後の人的資源の確保に万全を期している。

『写真週報』第125号（昭和15年7月17日発行）より



『写真週報』第245号

襷「大日本国防婦人会」、

（昭和17年11月4日発行）より 着物、割烹着

第5章 戦時下の婦人会活動



パナー写真：『写真週報』に見る戦時下の婦人会活動

「慰問袋を送りましょう」婦人会による兵士への慰問活動（第123号記事、昭和15年7月3日）、

一日体験入隊で軍事教練を受ける大日本婦人会員（第251号表紙、昭和17年12月16日）、

衣料切符を国に献納する大日本婦人会員（第276号表紙、昭和18年6月30日）、

『支那事変四周年』郵便車の慰問状受付に殺到する大日本国防婦人会員たち（第177号記事、昭和16年7月16日）、

「健兵の母を鍛えよう」集落の婦人会を挙げて行われた竹やりによる軍事教練（第269号記事、昭和18年4月28日）、

『写真週報』に掲載された銀行広告「戦時下国民の務めは職場を護って貯蓄に励む」（第 277 号裏面の広告、昭和 18 年 6 月 23 日）

戦時下の婦人会活動

戦時中、多くの女性たちは、反戦運動ではなく、兵士達への支援や社会的・経済的な戦争協力を目的とした婦人会活動に積極的に参加しました。

こうした婦人会のなかで、明治 34 年（1901 年）に創立された愛国婦人会は、上流階級の婦人が中心となり、会費によって傷病兵や戦死者遺族への救護などを行いました。一方、昭和 7 年（1932 年）に大阪港での出征兵士達への接待から始まった大日本国防婦人会（国防婦人会）は、出征兵士の見送りや戦死者の遺骨の出迎え、戦場の兵士への慰問活動など、庶民が行う草の根活動として急速に勢力を伸ばし、昭和 16 年（1941 年）には会員数 925 万人に達しました。

これらの団体は昭和 17 年（1942 年）2 月、大政翼賛会により統合され、大日本婦人会となりました。その結果、20 歳以下の未婚者を除くすべての女性が強制的に団体の会員とされ、女性たちは勤労奉仕や兵士への慰問活動、救護訓練・竹槍訓練など、様々な活動を通じて国家に貢献し、戦争に協力することとなりました。

写真週報では、こうした団体の慰問活動（写真週報第 177 号、第 271 号記事）や国債購入・貯蓄推進、軍事訓練（写真週報第 251 号）などが取り上げられています。

大日本婦人会員の日

お母さんぶりを見学

全国各地から動員され、兵器工場などで働く少年達に母親代わりとして、一日でも世話をしやりましょうと『職場の一日お母さん運動』が大日本婦人会員によって全国に巻き起こされようとしています。神奈川県藤沢市の大日本婦人会員達は近くの製鋼工場の寮で思いやりの深いお母さん奉仕活動を続けていました。

婦人会の奉仕のお礼に会社が用意したおやつを配る中経過

お母さんぶりを見学する少年達



『写真週報』第 271 号（昭和 18 年 5 月 12 日発行）より



慰問袋を詰める大日本国防婦人会のメンバー【個人提供】



慰問袋を前に置いて記念撮影（大日本国防婦人会）【個人提供】



愛国婦人会

【個人提供】



大日本国防婦人会写真

【Hさん提供】

【体験談：大日本国防婦人会の活動】

Hさん（高島市）

昭和5年（1930年）、私は神社の神主だった夫と結婚してこちらへ来たんです。昭和8年（1933年）に配属将校の呼びかけで国防婦人会が結成され、参加することになりましたんや。最初の頃は、徴兵検査の時にお茶の接待などをするのが主でしたけど、蘆溝橋事変が起こった時には、国防婦人会総出で出征兵士を近くの棧橋まで見送りましたわ。兵隊さんは今津から船で長浜へ渡ってそこから舞鶴へいかはったさかい。幟を立て、漁船も港に並び、大勢の人が軍歌を歌いながら兵隊さんたちを見送ったんです。この頃の見送りは大層、立派でしたんや。その時分は、役場に夜遅くまで明かりがついていると、また誰かに召集令状が来たと思ったもんです。

毎年、5月1日の神社の祭りが済むころになると、饗庭に大阪の砲兵が大砲を馬2頭で引きながらやってきました。そして、歩兵隊が敦賀から夜通し歩いて来たんや。みんな疲れ切ってはったから、境内で一服したんです。婦人会で茶を出してもてなしました。

昭和17年（1942年）に国防婦人会と愛国婦人会が合併して大日本婦人会になったんです。この婦人会は饗庭の仮兵舎に慰問へ行って、掃除をしたり、蚊帳の継ぎをしたり、将校の部屋に花を飾ったりしたんや。

その時分は、遠い戦地に赴く時に、どっか大きい駐屯地からまとまって行くと目立つさかい、饗庭から夜こっそり出て行くことが多くなったんや。その折に、普段は小さな電車だけが走っている今津の江若鉄道の駅に、長い貨車が入ってきたんです。夜1時とかに出発の知らせが婦人会に届くと、婦人会の皆が、お茶やおはぎや餅など、各自の家にあった食べ物を持ち寄って見送ったもんです。



大日本国防婦人会（国防婦人会）関係の資料

「銃後の花」大日本国防婦人会北里村分会（裏面は「国防婦人の歌」が記載されている）、国防婦人会会費及び受領書、大日本国防婦人会徽章、『日本婦人』第56号（昭和13年9月、大日本国防婦人会総本部発行）



大日本婦人会関係の資料

大日本婦人会徽章、大日本婦人会会歌、囑託書「大日本婦人会大津市支部中央連合班組長ヲ委嘱ス」（昭和18年1月）



『写真週報』第177号（昭和16年7月16日発行）より

【体験談：農繁託児所と竹槍訓練】

古川 みす さん（豊郷町）

昭和 17 年（1942 年）頃、おばあちゃんが豊郷の国防婦人会長をしていた。用事があると紺の着物を作り替えたもんぺを着て出かけていましたね。

国防婦人会では、有志の方を募って伊吹登山をされたり、農繁託児所をされていました。国防婦人会が主になって、秋と田植え時期の 1 週間ぐらいに、非農家のおばあちゃんたちがね、終戦まで託児所をしていたと思います。

おばちゃんらはたすきがけで、竹槍の訓練がありましたわ。私はおじいさんに竹槍を 2、3 本作ってもらってね、竹槍の先をほおかぶりさして、乳母車に斜めに入れて、子どもも乗せて小学校まで訓練に行ったことを覚えてますわ。隣の方も皆乳母車に乗せて行きましたしね。



豊郷町安正寺の農繁託児所〔古川みすさん提供〕

【体験談：夫の出征見送りとお迎え】

T さん（大津市）

夫の出征の時にも国防婦人会や沢山の人が送ってくれはった。皆が「安心せえ、あんばい面倒を見てあげるさかいに」と言ってたけど、そんなもん口だけですかな。千人針もしましたね。国防婦人会とかでもしてくれはったけど、辻に立っていたら皆がしてくれますんや。してもらったけど何にもならんなあ。

主人は石山で最初の戦死でしたので、遺骨が帰ってきて、葬式も 1 回で済まないんですよ。国防婦人会が白いエプロンで迎えてくれはって、石山駅で告別式をして、家に皆が送って来てくれはって、それ

から 1 週間か 10 日したら学校でありますのや。それに会社でもありますやろ。3 回か 4 回しました。忙しくて大変でしたよ。でも、晩になると寂しいですよ。大きな櫓は 2 本立っているし、お光は上がっているし…。



中西正三さんの出征時の見送り（大津市京町通）

〔中西一雄さん提供〕



中西正三さんの出征時の見送り（自宅二階より撮影）

〔中西一雄さん提供〕



弔辞（3点とも昭和 14 年 6 月 13 日付け）

左上：愛国婦人会小屋浦分区長 佐藤シズカ氏

右上：大日本国防婦人会横浜第二分会長 児玉トヨ子氏

下：大日本国防婦人会坂村第一分会長 久保千代子氏



大日本国防婦人会神戸本部での「無言の凱旋」

(昭和12年11月29日)

〔小川たづさん提供〕



小川正太郎さんの葬列

〔小川たづさん提供〕

【体験談：少女たちが見た婦人会活動】

武田 倫江さん（長浜市）・Kさん（彦根市）
戦時中、戦争の絵を描いていた武田倫江さんが見た
両親の本音です。

お母さんも国防婦会に参加していました。その
結束力はすごかったですよ。親は竹槍訓練にも行き
ましたが、「竹槍訓練なんかやったって、向こうは飛
び道具があるのにねえ」といってました。だけど、
それを口に出して言ったら非国民と言われるし。私
の父は変わり者でね。別れの挨拶に来た子に「絶対
死なずに帰って来い。危ないことはなるべく避けて
帰って来い」て、言ってたことがあるの。普通はそ
んなことをいっちゃあいけないのにね。

〔武田倫江さん〕

学校で空襲にあったKさんが出征を見送る夫人に
聞いた気持ちです。

町内で出征兵士があると学校から「今日は何時に

どこどこの誰々さんが出征しはるから」といって、
連絡が来ました。お見送りの歌も皆、意味が分から
んのに歌うてましたわ。

知り合いのおじさんは、乳飲み子がいても召集が
来たから出征しはったんや。奥さんに「お婆さんは
どんな気持ちや」って聞いたら、「私一人なら、そら
かなわへんやろけどな。みんなそうやさかい、そん
なもん、そらしょうがないわ」て、いわはった。そ
の人の、かわいそうに「ぼーん、いい子になれよー」
て、言って行か（出征し）はったのに、結局、戦死
しはったわ。

〔Kさん〕



○左ケース：大日本婦人会への統合

昭和17年（1942年）、政府の方針により愛国婦人会や国防婦
人会などが大日本婦会に統合されました。

国防婦会会の機関紙『日本婦人』は、統合により、大日本婦人
会の機関紙となりました。創刊号には新たな制服の型紙が付
録でつきました。

上段：『日本婦人』11月号（昭和18年11月1日発行）・創刊
号（昭和17年11月1日発行）・第54号（昭和13年7月1日
発行）、愛国婦会会のたすき・徽章、絵はがき「蒼れの傷兵明
るく活かせ」「兵隊さんは命がけ私たちは糧がけ」「忠魂安か
れ我等あり」

下段：大日本婦会会員制服実物大型紙（『日本婦人』創刊号
（昭和17年11月発行）の附録）

○右ケース：滋賀県内の国防婦会会の活動

県内の国防婦会会は、地域ごとに京都本部や敦賀本部などに
所属していました。米原町や大津南部などの分会では、地域に
根づいた様々な活動を行っていました。

上段：北里村銃後後援会規約（昭和12年9月19日）、絵はが
き「支那事変一周年記念 郷土の便」（大津市南各種団体）、『国
防婦人』第42号（昭和14年7月25日、大日本国防婦人会敦
賀地方本部発行）、『婦人国防』第38号（昭和12年12月1日、
大日本国防婦人会京都地方本部発行）

下段：大日本国防婦会会の雑囊（かばん）・たすき（米原町分
会）

エピローグ

『写真週報』に見えないもの

戦時中、多くの女性たちは出征する兵士の見送りに参加しました。中には、自らも女子勤労挺身隊や従軍看護婦として送られる側となった方々もいました。親しい人々との離別の思い出は、戦争を経験した多くの人々の中に今もなお、鮮烈な記憶として残っています。

兵士の出征を見送る婦人会活動について、写真週報記事と滋賀県での実際の姿を比較し、戦争の非情さについて考えていただくことも試みましたが実現できませんでした。それは、写真週報に『出征兵士を見送る写真』がほぼ掲載されていないからなのです。

『出征』の記事は、工場への徴用者（写真週報第299号）の見送りを除き、戦場へ向かう犬（写真週報第66号）や馬、金属製の燈籠など、人間以外の出征を扱ったものだけでした。戦場へ向かう兵士との別れを扱った記事はありませんでした。その理由は分かりません。ただ、戦時下の女性にとって、親しい人の出征や戦死者のお迎えこそが、厳しい戦争の現実や非情さと直面する瞬間だったからではないでしょうか。

戦時下の日常にあって、政府の広報誌『写真週報』に見えないものこそが戦争の本質のような気がしてなりません。

最後に、市役所で徴兵事務に従事し、自らの手で愛する人の召集令状を書いた女性の想いを紹介します。

【体験談：市役所職員 恋人の赤紙を書きました。】

Sさん（大津市）

大津市役所兵事課に勤務していたSさんは、連隊区司令部からの名簿をもとに召集令状（赤紙）を書く仕事をしておられました。当時18歳だった彼女には、母親にも秘密にしていた恋人がいました。

彼は4つ年上のいい人やったわ。母にも内緒にしてたけど、14歳の頃からずっと付き合ってた。純粋な恋やった。手ぐらいい握ったけど、デートは内緒で人の通らへん、暗い、暗いところを歩いてたんや。たまに砂糖の配給があつたりしたら、おはぎを作っ

て持って行ったこともあったわ。その人は甘党やったから、喜んで食べてくれはったわ。

昭和20年（1945年）6月に役所で赤紙を書いてたら、名簿に彼の名前が出てきたんや。ショックやった。ほんでになあ、よっぽどなあ、書かんとこと思たんや。始めはぬかしてたんや。抜かして、ずっと書いてたんや。せやけどな、最後に連隊区司令部で調べはるやんか。抜けたるといわはるやんか。ほんで「もう書いとこ」と思てな。彼、出征しやはった…。

彼も学徒動員で軍需工場に泊まり込みで行ってはったから、出征までに会う機会はなかったんや。自分が赤紙を書いたことを言われへんかった。

会えたのは出征の見送りの時やったわ。あの時分は国防婦人会というて、タスキ掛けの格好で、みんなが同じようにゾロゾロと見送ったんや。大勢の人が見送ってはんねんから、二人だけになれへんやん。汽車に乗らはる時にな、遠いところから手を振ってた。あれだけが思い出すなあ。思うとなあ、涙が出てくる。

昭和21年の暑いときやったなあ。彼の戦死をたまたま檀家の人から聞いたんや。南方、ジャワで玉砕。天皇陛下のために、お国のために亡くならはったから、名誉なことやねんけど、私は、そうは思われへんかったなあ。もうちょっとで終戦やったのになあ。私が赤紙を書けへんかったら、死んではらへんねん。私が赤紙を書いたから、死なはった、あの時は、そうとしか思われへんかった。辛かったなあ。アホみたいやねえ。自分も死にたくなつたなあ。初めての恋愛やもん。

この話は、64年間誰にも言わなかった。母にも言わへんかった。誰にも。



絵はがき

上段3点（恩賜財団軍人援護会大阪府寄贈）

「千人針」「勇士に捧げる純情」「武運長久祈願」

下段5点（「皇軍慰問絵はがき」『少女倶楽部』新年号附録）

「勝戦の舞」「慰問音楽会」「靖国神社詣」「銃後のつとめ」

「軍馬をいたわる」



絵はがき「皇軍慰問」「出征軍人」「愛国百人一首」（2枚）

「休閑地利用」「防火訓練」「軍事教練」

慰問絵はがきに見る戦時下の女性

戦場の兵士への慰問の手紙に使われた絵はがきです。

かわいらしい少女やかれんな女性を描いた絵の中にも、戦争の影が色濃く反映しています。



ジオラマ「戦争がなければ…」（人形は紙粘土製）



竹やり訓練

女性：着物、もんぺ、竹やり

男性：略帽、軍服上衣、軍袴、帝国在郷軍人会会員徽章

写真週報に見る出征風景



奈良県大峰山寺の燈籠など

（「銃後のカメラ」

写真週報第255号、昭和18年1月20日）



兵器工場への徴用出征者

（「征くも送るも赤紙と同じで」

写真週報第299号、昭和18年11月24日）



犬（三郎くん）

（「犬も応召」写真週報第66号、昭和14年5月24日）（国立公文書館所蔵）



出征兵士

（「兵隊さん唄らが響いた給です」

写真週報第220号、昭和17年5月13日）



壮行会

（イラスト、写真週報第293号、昭和18年10月13日）

『写真週報』第255号（昭和18年1月20日発行）、第299号（昭和18年11月24日発行）、第66号（昭和14年5月24日発行）、第220号（昭和17年5月13日発行）、第293号（昭和18年10月13日発行）より

※令和7年8月編集

第24回企画展示『写真週報』に見る戦時下の女性(会期:令和元年9月29日～12月22日) 展示資料一覧				
プロローグ 写真週報				
No.	資料名	点数	資料説明	提供者名
1	『写真週報』第136号	1	昭和15年10月2日、内閣情報部発行	個人提供
2	『写真週報』第175号	1	昭和16年7月2日、情報局発行	個人提供
3	『写真週報』第234号	1	昭和17年8月19日、情報局発行	個人提供
4	『写真週報』第333号	1	昭和19年8月9日、情報局発行	個人提供
第1章 少女と青春の思い出				
5	手拭い「教育勸語」	1		武田倫江さん提供
6	弁当箱	1		武田倫江さん提供
7	ノート「さんすう」	1		武田倫江さん提供
8	航空衣袴(陸軍飛行服)	1		奥村トシ子さん提供
9	『週刊少国民』第2巻第9号	1	昭和18年2月28日、朝日新聞社発行	個人提供
10	お母さんから喬子さんへの手紙	1	お母さんから疎開先の池田喬子さんへ届いた手紙	池田喬子さん提供
11	紅白のはちまき	1	精華国民学校	辰巳眞佐榮さん提供
12	茶碗	1		池田喬子さん提供
13	書道用水差し	1		池田喬子さん提供
14	糸巻き	1		池田喬子さん提供
15	ハサミ	1		池田喬子さん提供
16	大阪市立中大江国民学校徽章	1		池田喬子さん提供
17	世界名婦かるた	一式	『少女倶楽部』昭和12年新年号附録	辰巳眞佐榮さん提供
18	「大東亜」貿易ゲーム盤	1		池田喬子さん提供
19	おはじき	一式		池田喬子さん提供
20	『写真週報』第160号	1	昭和19年3月19日、情報局発行	個人提供
21	『写真週報』第292号	1	昭和18年10月6日、情報局発行	個人提供
22	『写真週報』第297号	1	昭和18年11月10日、情報局発行	個人提供
23	はちまき「神風」	1		土井節子さん提供
24	ブラウス	1		個人提供
25	もんぺ	1		個人提供
26	工具	2		北村正太郎さん提供
27	人形「女学生の勤労動員」	1		当館
第2章 戦時下の女性と職業				
28	軍隊手帳(松崎寿吉さん)	1	松崎寿吉さんの遺品	松崎香苗さん提供
29	貴重品袋	1	松崎寿吉さんの遺品	松崎香苗さん提供
30	簡易髭剃り	1	松崎寿吉さんの遺品	松崎香苗さん提供
31	鏡	1	松崎寿吉さんの遺品	松崎香苗さん提供
32	お守り袋	1	松崎寿吉さんの遺品	松崎香苗さん提供
33	水天宮武運長久御守	1	松崎寿吉さんの遺品	松崎香苗さん提供
34	腕章	1	日本赤十字社	個人提供
35	『白衣の従軍記』	1	大津赤十字病院 看護婦同窓会発行	安達ヨシ子さん提供
36	『日本赤十字従軍看護婦 戦場に捧げた青春』第1巻・第2巻	2	昭和63年8月15日、元日赤従軍看護婦の会発行	個人提供
37	『写真週報』第54号	1	昭和14年3月1日、内閣情報部発行	個人提供
38	寄せ書き	1	昭和19年4月28日応召	奥村トシ子さん提供
39	ノート	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
40	支那事变従軍記章	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
41	赤十字徽章	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
42	華北解放記念徽章	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
43	解放奨励章徽章	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
44	解放華中南記念章	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
45	分娩補助道具	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
46	注射器	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
47	ハサミ	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
48	鞆	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
49	寄せ書き日の丸	1	西浦一系さん関係資料	西浦一系さん提供
第3章 満州へ渡った女性たち				
50	ベルトの芯に縫込んで持ち帰った日記の一部	一式		神戸幸子さん提供

51	日記「追憶」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	3	神戸幸子さんが帰国直後に当時のことを綴ったノート	神戸幸子さん提供
52	旗「報国農場勤労奉仕隊」	1		神戸幸子さん提供
53	旗「第十三遣送団第二十五大隊第六中隊第三小队」	1		神戸幸子さん提供

第4章 戦時下の結婚・出産・育児

54	死亡告知書	1	昭和21年11月22日付	木村よりさん提供
55	死亡事実証明書	1	昭和21年7月1日付	木村よりさん提供
56	『君発ちし後の記』	1	2005年10月1日発行、私家版(田中もとさん執筆)	田中もとさん提供
57	軍帽(陸軍)	1	田中為三郎さんの遺品	田中もとさん提供
58	熱七等青色桐葉章	1	田中為三郎さんの遺品	田中もとさん提供
59	煙草ケース	1	田中為三郎さんの遺品	田中もとさん提供
60	田中為三郎さんから田中もとさんへのハガキ	1	田中為三郎さんの遺品、年月日不明	田中もとさん提供
61	眼鏡(ケース付)	1	西川よのさんが戦争のころに使っていたもの	西川よのさん提供
62	足袋	1	西川よのさんが戦争のころに使っていたもの	西川よのさん提供
63	裁縫箱	1	西川よのさんが戦争のころに使っていたもの	西川よのさん提供
64	スター紐(赤・白)	2	西川よのさんが戦争のころに使っていたもの	西川よのさん提供
65	仕付け糸	一式	西川よのさんが戦争のころに使っていたもの	西川よのさん提供
66	縫い糸	一式	西川よのさんが戦争のころに使っていたもの	西川よのさん提供
67	巻糸	2	西川よのさんが戦争のころに使っていたもの	西川よのさん提供

第5章 戦時下の婦人会活動

68	標「大日本国防婦人会」	1		清水竹治郎さん提供
69	着物	1		西澤美重子さん提供
70	割烹着	1	※戦中の資料ではありません	個人提供
71	帋辞 愛国婦人会小屋浦分区長 佐藤シズカ氏	1	昭和14年6月13日付け	個人提供
72	帋辞 大日本国防婦人会横浜第二分会長 児玉トヨ子氏	1	昭和14年6月13日付け	個人提供
73	帋辞 大日本国防婦人会坂村第一分会長 久保千代子氏	1	昭和14年6月13日付け	個人提供
74	「銃後の花」	1	大日本国防婦人会北里村分会	滋賀県立男女共同参画センター所蔵
75	国防婦人会会費及び受領書	1		奥島すみ子さん提供
76	大日本国防婦人会徽章	1		中西一雄さん提供
77	『日本婦人』第56号	1	昭和13年9月、大日本国防婦人会総本部発行	滋賀県立男女共同参画センター所蔵
78	大日本婦人会 袖章	1		個人提供
79	大日本婦人会 会歌	1		奥島すみ子さん提供
80	囑託書「大日本婦人会大津市支部中央連合班組長ヲ委嘱ス」	1	昭和18年1月	永谷芳昭さん提供
81	『日本婦人』11月号	1	昭和18年11月1日、大日本婦人会発行	滋賀県立男女共同参画センター所蔵
82	『日本婦人』創刊号	1	昭和17年11月1日、大日本婦人会発行	滋賀県立男女共同参画センター所蔵
83	『日本婦人』第54号	1	昭和13年7月1日、大日本国防婦人会総本部発行	滋賀県立男女共同参画センター所蔵
84	愛国婦人会のたすき	1		北川麗三さん提供
85	愛国婦人会の徽章	1		北川麗三さん提供
86	絵はがき「誉れの傷兵明るく活かせ」「兵隊さんは命がけ私 たちは糧がけ」「忠魂安かれ我等あり」	3		田村芳江さん提供
87	大日本婦人会会員制服実物大型紙	1	『日本婦人』創刊号(昭和17年11月1日発行)の附録	滋賀県立男女共同参画センター所蔵
88	北里村銃後援会規約	1	昭和12年9月19日	滋賀県立男女共同参画センター所蔵
89	絵はがき「支那事変一周年記念 郷土の便」(大津市南各種 団体)	一式		滋賀県立男女共同参画センター所蔵
90	『国防婦人』第42号	1	昭和14年7月25日、大日本国防婦人会敦賀地方本部発 行	高橋 正さん提供
91	『婦人国防』第38号	1	昭和12年12月1日、大日本国防婦人会京都地方本部発 行	滋賀県立男女共同参画センター所蔵
92	大日本国防婦人会の雑囊(かばん)	1		個人提供
93	大日本国防婦人会のたすき	1	米原町分会	北川麗三さん提供
94	絵はがき「千人針」「勇士に捧げる純情」「武運長久祈願」	3	恩賜財団軍人援護会大阪府寄贈	田村芳江さん提供
95	絵はがき「勝戦の舞」「慰問音楽会」「靖国神社詣」「銃後のつ とめ」「軍馬をいたわる」	5	「皇軍慰問絵はがき」「少女倶楽部」新年号附録	田村芳江さん提供
96	絵はがき「皇軍慰問」「出征軍人」「愛国百人一首」(2枚) 「休閑地利用」「防火訓練」「軍事教練」	7		田村芳江さん提供
97	ジオラマ「戦争がなければ・・・」	一式	紙粘土製	当館
98	着物、もんぺ、竹やり	一式		個人提供
99	略帽、軍服上衣、軍袴	一式		個人提供
100	帝国在郷軍人会 会員徽章	1		田中もとさん提供